

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

1990—5—



幼稚園教育指導書・増補版



幼稚園教育を理解するために、また具体的な活動をよく理解するための手掛かりとしての必読書。

幼稚園教育要領について解説し、幼稚園が適切な教育課程を編成、実施する上での最上の参考資料であり、実際の具体的な保育のあり方、姿がわかる教育指導書。

文部省・著

A5判・192頁・定価320円(本体311円)

幼稚園教育要領解説



教育要領改訂の理由？「総合的」とは？「領域」とは？ などなど、教育要領の各項目について、明快な説明と、考え方の基本がのべられています。また、著者以外の協力委員による補足の話し合いもつけられて、よりわかりやすい内容となっています。

目次から

- 第1章 幼稚園教育要領はなぜ変わるのか
 - 第2章 どんなふうになるのかー考え方の基本ー
 - 第3章 幼稚園教育の内容
 - 第4章 これからの幼稚園教育を計画し実践するために
- 付録 「幼稚園教育要領」全文

岩崎婉子・大場牧夫・黒川建一・小林美実・近藤充夫・高杉自子・森上史朗・編著

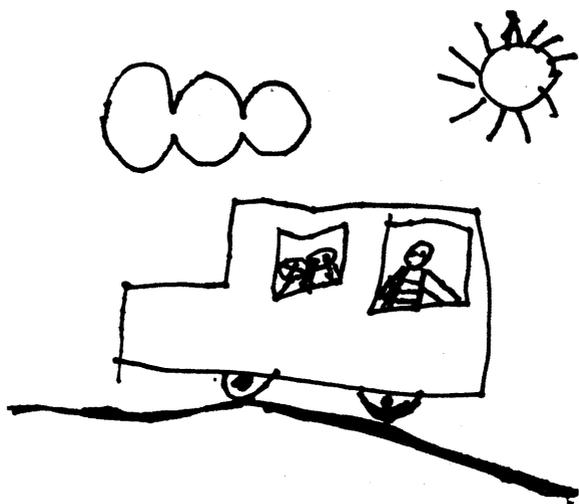
A5判・270頁・定価1,200円(本体1,165円)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

キンダーブックの

フレーベル館

幼見の教育



第89卷 第5号

幼児の教育 目次

— 第八十九卷 第五号 —

© 1990
日本幼稚園協会

人間の成長における行為の意味(5)

輝やく顔を生み出す保育……………津守 真…(4)

小さな保育史……………村山 英子…(9)

チエコ便り(3)
社会改革の進む中で……………大槻 優子…(13)

五月の子どもたち——その1
春の子どもと土のベッド……………新井 隆俊…(18)

五月の子どもたち——その2
その時に……………中谷喜久子…(25)



倉橋惣三「保育法」講義録を読んで

「保育法」講義録から「幼稚園真諦」を読む……………友定 啓子…(30)

園庭より(2)

好きな色……………松井 とし…(38)

大人と子供のかかわり見聞録……………大多和 檀…(40)

おもちゃを通しての人間形成についての一考察

新しい造形素材としてのブロック玩具の取り組み報告…芸術教育研究所…(44)

若いお母さんたちへ

初めて出会った人・もの——祐子二歳と三歳の頃……………小園江幸子…(57)

表紙イラスト・林 健造

扉題字・堀合 文子

扉カット・お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット・福田 理恵

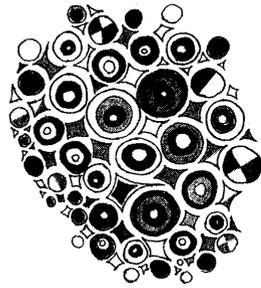
編集委員・本田 和子／豊田 一秀・上坂元絵里

編集部・大沢 啓子



輝やく顔を生み出す保育

津守 真



一
ベトベトをこねる

ひとりの子どもが私の手をひいて職員室にいった。その子は私よりもひと足早くに走ってゆき、ひとりの職員のふだん鍵のかけてある机のひき出しに手をかけた。その日はひき出しがすぐにあき、アラビア糊のびんが目についた。その子はうれしそうにこっと笑ってそのアラビア糊と、机の上のガラスの灰皿をもって私の机にきた。そして、灰皿の上のアラビア糊を、最初は一滴ずつ、次第に二滴三滴とたらし、最後には容器の口を取ってドロドロとたらし、手をベトベトにしながら灰皿を糊でこねまわした。ときどき私をみながら、良い顔をしてひとしきりたのしんだ。私もその子のベトベト好きはよく知っていたので、口をさしはさまずにそれを見守った。

この子は昨年一年間、担任の先生と、糊やえのぐのベトベトを手一杯つけ、物にぬってこね、あたりをベトベトにした。そうしながら大人によりかかり、大声をあげた。その仕方は、大人にびつたりとくつつくのでもなく、はなれるのでもなく、体重を中途半端に支えることになるので、相手をす

るのもらくではなかった。担任の先生はそのベトベトをこねるのをいやがらずに、長い時間その子とつき合っていた。この子はその先生との間でベトベトをやりきることによって、大人に対する信頼を学んでいたように思われた。最近では、この子どもは美しい色でガラス窓を塗ったり、裏庭で材木にえのぐをぬったりして、自分で遊べるようになってきている。

この日、私は久しぶりにこの子とベトベト遊びをやった。ベトベトが好きなことは前も同じなのだが、以前のように大人にだだをこねるのではなく、その子はひとりで坐って灰皿に糊をぬりつけると水道の流しできれいに洗った。そしてすっきりした顔をしてひとり保育室にもどっていった。

同じようにベトベトをこねる行為も、どっちつかずの不安定な感情の中に閉じこめられてするのはなく、いまは物質の感覚をたのしむ遊びになっている。子どもは人に対する信頼と不信との間を揺れ動いていて、その混乱した感情がこの行為を創り出したのではないかと思われる。だだをこねながらベトベトをこねることが激しくなると、大人はその行為自体を受けいれきれなくなると、事態は悪化する。そのようなときに、担任の先生は、この子どもの行為と感情をよく受けとめ、その大人を通して、この子は不信ではなく、信頼を選びとることができるようになったのだと考える。

信頼と不信のはざま

いまでもベトベトをやらせてあげるのは、ときによって容易ではない。この日、いつも鍵がかかっているひき出しの中にアラビア糊が入っているのをこの子は知っていたに違いない。でも、このひき

出しにはほんこも入っているし、先生の大事な物が入っている。ひき出しがすぐにあいたときには私もびっくりしたが、この子のうれしそうな顔をみると、すぐにとめる気にもならない。こんなとき私はいつも葛藤の中に立たされる。アラビア糊を出したあと、他の物に手を触れないように私はすぐにひき出しに鍵をかけることもできた。だがもしも私がそうしたら、その子は私に不信感を感じただろう。実際この子は何度もこのひき出しにもどり、ベトベトにするものがないかを確かめた。

保育のあとでその先生にこの日の話をすると、笑って許容してくれた。同じ保育の場で、その人もまた同様の葛藤を経験している。子どもの側の感情がもつれているときには、その子の無意識の表現は、しばしば、大人が簡単に受けいれにくいことに向かう。大人に葛藤を起こさせるのだから、大人は自分自身の中で、また職員同士の間で、その葛藤を生きななければならない。それにどのように対処してゆくかは状況によって異なり、答えは一樣ではない。いずれにせよ大人自身の戦いがなかったならば、子どももまた自らの中の葛藤を乗りこえることができないのではないだろうか。

この日の私との間のベトベト遊びは、二年間にわたるいくつもの山を越えた後の小さなエピソードにすぎないのだが、この子どもと久しぶりにつき合って、ベトベトをこねる行為をベトベト遊びにまで導びいた担任の先生と、この子どもとの関係の成長を思わされた。

二

製作に没頭する子どもたち

ある半農半漁の地域の幼稚園を訪問したときのことである。たまたま五歳児のクラスにいった私

は、すぐ傍の机でひとりの女の子が、箱に長方形をマジックでかいているのに気をひかれた。その子は長方形の上に三角形をつけた。窓の上の日除けひさしかもしれないし、家の屋根かもしれない。家の外側である。それからその子は画洋紙を切ってテーブル、椅子、ベッドなどをつくり、箱の中に家の内部を作った。これで家の内部と外部と両方ができた。よく見るとわきにくつも箱が並べてあり、ひとつの箱にはふたが立ってあって、華やかな髪飾りをつけ、花のドレスを着た四人の女の子が描かれていた。先週からその子はこの家を作っていたという。この日も朝からそのつづきにとりかかって、帰るまで二時間半ほど、その場を動かずに作りつづけていた。男の子たちもわきで箱を重ねて熱心にロボットを作っていたが、よく見ると、ロボットの内部には家具が備えてあったり、迷路が作られている。ここにも内部と外部の統合のテーマがある。

ふと、私は二十年以上も前に、私の子どもたちが同じように家の内部と外部を作り、華やかに着飾った女の子を描き、互いにしゃべり合い見せ合いながら、毎日のように製作して遊んでいたことを思い出した。そのころ私がしばしば出入りしていた附属幼稚園でも、毎日つづけられていたお店やには、いろいろな工夫されたお弁当や、さまざまな形の時計やカメラが並べられ、手にとると楽しい発想が感じられた。昭和三十年代の附属幼稚園やわが家でよく見た光景である。

この日、私は久しぶりに、幼稚園で製作に没頭する子どもたちの姿にふれた。この子どもたちは、ほかのことに気を散らされずに、自分の心の中に湧き出たアイデアを製作に表現しようとしている。この幼稚園は半農半漁の地域で、高層マンションに住む人は皆無であり、ほとんどの人が祖父母と同居しているという。いわば三十年前の生活形態が保たれている。その上に入園以来三年間にわ

たつて培われた、子どもがはじめる活動を大切にしてきた生活があり、いまその最後の時期に至って輝やくばかりに自信にみちた自己認識がある。描かれた女の子たちは最高に着飾り、内なる自分と外なる自分とが力強く統合されている。ここでも子どもたちと保育者との関係の成長を思わされた。

能動性と疑惑とのはざままで

最近私は障害の子どもたちの中にいるから、こういう華やかな製作に出会わないのかもしれない。だがそれだけではなさそうである。その背景には、社会変化に伴う子どもたちの生活の変化があるのではないだろうか。高層マンションに住む子どもたちは、自分でドアをあけて外に出てゆく経験をしたことがない。ソファからとびおるだけで階下の住人から苦情を言われることも珍しくない。

幼い子どもの中に自分から何かをしようとする能動性が生まれると同時に、走ればころび、さわれば熱く、それを避ける気持ちもはたらく。その両方の気持ちの間でためらいながら、子どもは能動性を選択してゆく。能動性に対する否定的な環境が大きすぎると、普通に幼児がさわったりためしたりするような経験をすることなく幼稚園の時期になってしまう。そうすると幼稚園でその部分をていねいに保育して、他人や自分に対する信頼をたしかにし、能動性を選択するように自我を強めてゆくことが必要になる。その自我の形成の上に、創造的製作による自己表現が可能になるのではないか。

それでは現代の社会変化の中では、子どもの成長の上で何かが欠落するのだろうか。私はそのようには考えない。それぞれの子どもが生きる毎日の生活の中で、子ども自身が望み願っていることにこ

小さな保育史

たえる保育をすることによって、製作による表現はなくとも、子どもの顔は輝やき、それぞれなりに健全に成長するだろう。社会の状況が変化すると、保育者はそれまでに自分が経験しなかった新たな事態に直面し、子どもが生きている世界を新たな眼で考え直さねばならなくなる。このことはどの時代の保育者にも共通のことであろう。

(愛育養護学校)

村山 英子



小さな保育史——それは、言い換えれば、昭和三十一年四月から今日までの、私がかかわった保育の歴史である。しかし、単に私ひとりの保育であるにとどまらない。おそらく今もそうであるように、当時の幼稚園のあ

り方は、さまざまであったと思われるが、私の保育もまた、時代の流れの中にあり、当園の歴史の中にある。ほんの小さな一コマに過ぎないが、確実に存在した歴史の断片である。

私が保育者となって、まず、「大切なこと」として植えつけられたのは、子どもの「自発性」と「創造性」を育てることだったように思う。しかし、事改めて誰かに言われたという記憶はない。周囲のことから感じとったものである。「自由遊び」と呼ばれた子どもの自由な遊びの時間は、「課業の合間の遊び時間」ではなく、子どもが「自発性」を発揮する場として、大切に考えられていたようである。

しかし一方では、保育者の計画による活動も、保育の中で重要な部分を占め、その計画に、いかに子どもを自発的に向かわせるか、その活動の中で、いかに創造性を伸ばすかに、保育者の技術が問われていたように思われる。

昭和三十年代の初め頃のことを思い出してみると、まず浮かぶのは、週二回の音楽リズムの時間のことである。遊戯室と呼ばれるホールを使用できるのは、一日二クラスで、六クラスある当園では、一クラスが一週に二回ずつ使えることになる。その日は、時間になると、保

育者の示唆で、「○○の組、おあつまり」、「○○の組、おゆうぎ」と節をつけて、子ども同士が声をかけ合い、集まって、一列に並んで遊戯室に行く。そして、三、四十分、あるいはそれ以上の時間を、組全体が一緒に活動する。活動の内容は多様であって、歩く、走る、跳ぶ、の基本動作と、それに変化をつけたものや、動植物や乗物などの表現、曲や歌に合わせた動き、簡単なストーリーのある自由表現などである。

ストーリーのある自由表現というのは、例えば、春になって、お花が沢山咲きました。風がそよそよ吹いて、お花がゆれていますね。お隣のお花と、「こんにちわ」とご挨拶をしているお花もありますね。きれいなお花が咲いたので、ちょうちょうさんも飛んできましたよ。「蜜をくださいな」と言っているちょうちょうさんもいますね。仲よしになって、一緒に、みんなで踊りましょう。……などというような筋で、ピアノを弾き、それに合わせて、子どもたちが、花になったり、ちょうちんになったりして、いろいろな表現をする。子どもが考え、

工夫した表現は、とりあげてはめてあげる。テーマは、折々の工夫で、“遠足”であったり、“海のおそび”であったり、いろいろである。

新しい歌や、楽器の指導なども、“お集まり”の呼び声で、クラス全員が保育室に集まった。それぞれの活動の中では、子どもの自発性や、考え、工夫が大切にされて、楽器の打ち方なども、子どもの発想をとりあげたりしたが、いつ、どのような活動を入れるかは保育者の計画によった。

絵画製作に関する活動は、あまり、全員一斉に始めることはなく、用意された教材を、やりたい子どもから始め、時間の幅をもたせながらも、結果としては、皆が経験するという形をとっていた。しかし、時には、遠足や運動会などの生活経験を絵に表現するというような活動を課題としたり、皆の絵を集めて、紙芝居のようにして見せるなど試みた記憶もある。

月曜日には、日曜日に経験したことを皆の前で話す“生活発表”と呼ばれる活動もあった。いろいろな活動

を、バランスを考えながら、盛り込んだように思う。

また、いろいろな領域にまたがった、総合的な活動もあった。子どもの生活に密着した活動が先にあり、抽出すると、いろいろな領域の“ねらい”となる、という方が適切かもしれないと思う。これは、何週間も、あるいは月を単位に考えるような大きな活動で、テーマもいろいろであった。“動物園”“お店やさん”“おもちゃや”“つり堀”“お祭り”“遊園地”など、その活動の盛り上がりは、保育者にとっても大いにやりがいのある、興味深いものであった。

見よう見まねで、先輩の保育から学びとることに忙しかった新米保育者の私も、その間に、いくつもの疑問を暖め始めていた。

ベテラン保育者のクラスでも、全員でする活動に、興味のないようすで、ぼんやりしていたり、全体の動きにのらずに乱す子どもがいたりする。園で過ごす時間は、一人ひとりの子どもにとって、かけがえのない生活のひとコマではないか。それぞれの子どもに、その時間を返し

てあげて、その子どもにとって、より生き生きと生きられる時間にしてあげた方がよいのではないか。まして、全体を乱す子どもへの言いかけや叱責は、子どもの発達の時期によっては、全体への活動に参加させるプラスの面とは別な、マイナスの影響を生じているのではないか。なぜ、全員が一斉に、その活動に参加しなければならぬのだろうか。等々、疑問をもった。

私の疑問が次第に強まってきた頃、先輩の一人が、新しい方向をとり始めた。昭和五十年前後だったと思う。週二回の遊戯室での音楽リズムの活動をやめ、毎月の誕生会のための、お菓子入れ作りをやめた。又、昼食のあとの、全園児が揃ってする体操もやめた。

この新しい方向は、必ずしも、各組の担任に、すんなりと受け入れられたわけではなかったが、時間をかけながら、園全体に浸透し、定着していった。

現在の保育は、一人ひとりの子どもの発達に合わせ、一人ひとりの子どもの活動を大切に作る方向へと、より進んできたと思われる。朝登園してきた子どもたち

は、遊戯室にとんでいって、大積木で、おとも驚くような大きなものを作ることに熱中したり、自分たちが作ったお花や、アクセサリーのお店を出して売り買い遊びをしたり、劇あそびをして、小さい組の人たちをお客さまに誘ったり、いろいろな遊びを展開する。

クラス全員が参加する活動のような、外側からみての盛り上がりや、みごときはないが、子どもの内側から湧き出た興味の、生き生きしさが、そこにはある。理論が先に立つのではなく、子どもの姿を見つめるところから新しい保育の流れが作られてきたように、外側から眺めた大人の自己満足ではなく、子どもにとっての生活の意味を考えると、保育を考えていきたいと思う。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

社会改革の進む中で

大梶 優子



T様

お見舞の、また励ましのお手紙を有難うございます。

新聞やテレビでの情報を追いつながら、遠くから応援して下さっているとのこと、とてもうれしいです。私がうれ

しいというのも、少し変な感じですが。私自身は、ここ

に日本人、つまりは外国人のまま暮らしています。チェ

コスロヴァキアの人々からみれば、「お客さん」的な要

素を多分にもちあわせているわけです。家族の一員とし

て歩みを共にしながら、社会情勢の動きをとらえ、胸お

どる思いをしながら、心情的には高まっている横で、や

はり感心したり、尊敬したり、案じたりといったような

「ながめる」体験が成立してしまいます。近くから、私

も応援していますと言う方が、適切かもしれません。で

すから、応援して下さるお気持ちを、すぐに家人に伝

えました。心から喜んでいきます。

返事を書くのが遅くなつてすみません。十一月十七日

夜の出来事が伝えられて以来、急速な社会変化をとらえ

ていくのに精一杯というところです。それを怠ると、変

化の流れがわからなくなるといふ心配が先だちます。社

会全体が、多くの人々の望む、よりよい方向に変わって

いくので、一層積極的にそこへ関わっていきたくなるの

かもしれません。

最初の情報は、駅の壁や店のショーウィンドウに貼られたビラでした。学生デモ弾圧に対する抗議文、労働者や勤労者の学生支持表明に始まり、地域や職場での改革の進め方の助言、ワンクッションおいたユーモラスな従来の体制への批判、子ども達の応援など、多種かつ多量なのにびびくりしました。町の中心ばかりではなく、郊外のバス停や山のスキーリフトの切符売り場といったところまで広がっているのにも驚きました。書く人も、貼る人も、読む人も、皆まじめで熱心です。ビラのまわりには、いつも静かな落ち着いた雰囲気か漂っているのに気づきました。帰宅途中の夫婦が、若者達が、連れだつて読んだ後の感想を言い合う時も、おだやかな口調なのです。一度手渡されたビラが、路上に舞い散るのは、ずい分違った光景だなあと思いました。新しい大統領が選ばれて、政府のレベルでの改革が始まり、ビラは一掃されました。貼った後も見えないほど、壁もショーウィンドウもピカピカになりました。あたり前というのは、何か気恥ずかしい気がします。一人一人の市民の良識の

具現ともいえるのでしょう。

学生達の立ち上がりから数日遅れて、テレビ局が、市民の立場に立つて公開する方針を表明しました。テレビ番組がおもしろくなりました。すっかり「テレビっこ」になっています。辞書を横に置いて、メモをとりながら、テレビを見続ける、このような経験は初めてのことです。それでも間に合わないときは、わからない単語を叫んで、「後でお願いね。」と、家人に声をかけておきます。「私に用事のある人は……。」と、番組を見ない時間を前以って具体的に言うのも忘れません。そして、その時に、子ども達の学校からの連絡、宿題の点検とサイン、あるいは家事をすませます。今にして、「テレビの時代に生きている」ことを実感しています。テレビを見るのが、時間の無駄と思える時が、再び来るでしょうか。その時は、どのような社会になっているのでしょうか？

テレビで全体状況を知っておいて、特別の内容だけ新聞で読みます。追いかけられるようにして読みますか

新聞雑誌でよくご存知のことと思います。世界情勢との対応については、私よりもずっと多くの情報を得ていらっしゃることでしょう。私がここに住んでいて、考えてみたいこと、不思議に思えることは、もっと素朴な、人々のくらし、人々の行動のレベルでのことです。

それは、政府の命令で動いた人以外に、暴力をふるった人が全くいないというような事実です。たとえ暴力をふるわれても、「目には目を」式の反応をした人がいないという事実です。プラハ市の中心のヴァーツラフ広場に、大勢の人が集まった時、すべての店は営業中ででしたし、駐車中の車はたくさん並んでいました。集会が終わって人々が散っていく時、町はやはりもとの状態でした。そして、集会が重なる毎に、改革は一步一步進められていきました。

大勢の人々は、皆それぞれにやって来ました。そして、あたかも行動のしかたや順序を予行演習したかのようになり、適切に、敏速に、しかも整然と行動しました。それが、改革を進めていく大きな力になりました。いった

いどうして、こんなにたくさんの方が、指示も助言もなしに、一瞬の間に何をすべきかを判断し、行動することができるのでしょうか？ 私がそれを口にした時、知人が少し笑って言いました。「行動形態だけを問題にするのならば、長年の学習経験がありますよ。ただ四十年間は、動員されてのことでしたがね。メーデーの時など。」それを今回、新しい目標に向けて応用したということでしょうか？

フランスの報道紙は、この「文化水準の高い人々の行動」を称えて、一連の動きを「ビロード革命」と名付けました。この国では、「静かな革命」「おだやかな革命」と呼ばれています。歴史の発展、特に最近の東欧の一連の改革の流れに位置づいて実現したことです。従来になかった、一歩進んだやり方で実現したことだけは明らかです。

はじめの頃、「子どもの革命」ともよばれました。学生達が先導して、大人達がこれを支持する形ですべてが始まったからです。各々の立場を守り、各々の課題を成

立させて共闘、いえ共働しています。

学生達の動きや発言を、まず大人自身が尊重しました。真実に対して誠実であろうとする態度、政治に対する理想、市民としての勇氣と自覚ある行動などを、経験もなく、学習する機会も与えられずにいて、どのように身につけたのか、教師や母親達が感心しながらも不思議がりました。学生達が、大人集団で発言する時、「学ぶ者」「未来の専門家」の立場を守り、それが過去の歴史を担った大人が無理をしなければならぬ苦しい立場を救うことにつながっているようです。一般に言われる「親子の断絶、世代のギャップ」は、どこにあるのでしょうか。人間を大切にする精神、民主主義の精神は、一度習得すれば、人々の意識のどこかに生き続け、はつきりとはしない形で世代から世代へと、日常のくらしの中で受け継がれるものなのでしょうか。時期到来の時、誰もが表現できるように心準備できていたというのでしょうか？ 不思議なことですが、すばらしいことです。

こうした運動の精神的、組織的な柱になっているの

は、「市民フォーラム」という団体です。政党ではなく、自由選挙の実現と共に解体することになっている運動体です。フォーラムとは、ラテン語で広場という意味だそうです。自分達の生活、共同体をよりよくするために集まり、話し合いをする「市民の広場」というわけです。全国各地で自発的に組織し、すべての人を、あらゆる活動を包み位置づけて、活動を開始しています。

この国に住み続ける私に、いろいろな人々が、何が入っているか尋ねました。「静かな落ち着いたくらしがありますし、母親としては、家族生活が大切にされる社会は、何よりうれしいことです。」これは、本音です。将来、高度経済成長が実現して、豊かな消費生活がもたらされても、同じことが言えるようにというのが、私の偽りのない願いです。

思うまま感じるままの手紙になりました。

一九九〇年一月十四日 プラハにて

五月の子どもたち——その1

春の子どもと土のベッド

新井 隆俊

幼稚園の庭から小高い丘がすぐそばに見える。丘の北斜面の尾根はかつて多摩川の蛇行によって削られたのか三角形をしている。その形にちなんで子どもたちと名づけた三角山の稜線が、雑木林の新緑で隠れるようになる。時にウグイスの鳴き声が聞こえて来ることもある。

庭で遊んでいる子どもたちを誘ってしばらく聞き耳をたてる。五月になると幼稚園にある巣箱にシジュウカラが毎年のように住んでくれるので、ひなに餌を運ぶ様子や巣立ちの賑わいの様子を子どもたちと一緒に見守ることが出来る。シジュウカラは警戒もせず子どもの遊び声中を自由に巣箱まで飛んで来る。

春になって花が咲き始めると、子どもたちに対して土

ばかりの花壇しか用意出来なかった冬の間の気持ちから解放させられる。子どものために環境を整えることにかけては格別な、自然という名の先生が何人もやって来てくれたような気持ちである。考えてみれば、ものごとに関番があること、共存して暮らすこと、分からないことがあることなど、どれも自然が人に教えたことばかりである。興味をもって見る子どもに、違いを考えさせたり、記憶に残るような場面をいくらでも用意して子どもに働きかけてくれる。春はたいへん心強い味方である。眠っていたと思うものを揺り起こすことも、揺り起こされることもつらいことである。そんな意識を持つ大人という例外をのぞいて、植物も、昆虫もそして子どもも

春の生命力を素直に受け入れているようである。

登園の途中、道端かまだ耕作の始まらない田んぼで子どもが草をつんで来る。雑草の花であるから、とがめる人もいない。植物の種の増やし方、運ばせ方には想像を絶するような巧妙さがあるので、雑草の方にも考えがあつて、幼い手のひらで種を運んでもらおうとしているのかも知れない。幼稚園に着くころには、子どもの片手にいっぱい握られた草花は半ばしおれかかっている。時には私にその草花がプレゼントされる朝がある。多少の時間をかけて得た自分の所得物全部をくれる行為もありがたいが、その花束を友好のしるしとして受け取る時は嬉しいものである。

子どもたちにとって草花の名前はおそらくずっと後からくるものである。名を知らずにある草花があることを知っている。そういう時期はとても大切であると思う。子どもの世界には有名無実というものが入り込めないものだと思ふことがある。春には新しく仲間に加わった子どもたちの名前をまず覚えることに力を注ぐが、子ども

の名前を覚えると、その子どもを多少理解したような気持ちになるようなことに対しては自分で用心しなければならぬと思う。

五月になると子どもたちはプランコをより自由に使うことができるようになる。プランコに乗れない子どもは少ないが、順番を待ったり交代したり、安全な使い方を身につけるまでは多少の制約がある。そのプランコのまわりにコの字の形にプランターが置いてある。プランコの安全柵のかわりである。鉄の棒でできたプランコの柵をよく見かけるが、幼稚園の子どもにとっては鉄棒という遊具になってしまいそうであるし、平均台のようにその上をあるく子どももあるかもしれない。そんな心配も手伝って大きめのプラスチックのプランターに花を植えプランコのまわりにぐるりと置くことにした。

子どもは自分で植えた花を大事にしてくれる。土の重さもちょうどよく、ボールがプランコの空間に転がり込まないように止めてくれる。プランターは一年おきぐらゐに買い替えるが、子どもに注意力をそれとなく呼びお

こしてくれるなかなかいい花壇である。パンジーをたくさん買って子どもと先生と一緒に植え込む仕事は毎年のことになった。砂場のシャベルは運動場を掘らずに砂場で使うように入園した子どもたちに勧められているが、このときばかりは土を掘れるので参加者が多い。

保育室のテラスと運動場の間には六十センチぐらいの高さの花壇がある。いろいろな役目を果たしている花壇だが、子どもの目に花を近づけたいと考えて作ったものである。花の匂いもすぐ嗅ぐことができるし、子どもの顔のすぐ前に紋白蝶や花蜂がやって来るのでとてもありがたい。花壇を高くしてから、草花に関する子どもたちの質問が増えたようである。

幼稚園には門から少し離れた所に小さい畑がある。子どもたちがお芋をひと株ずつ育てて、さらに花壇のために数種類の花の苗を育てることのできるぐらいの広さの畑だが、畑というより空き地か雑草園と思われる時期の多い場所である。近所の小学生がよくボール遊びをし



て、作物を植えた直後に運動靴の跡を様々な向きに残してくる。普段から畑らしくないので「今は畑だからね。」とことわることは気が重いものである。

田んぼでもないのに、子どもたちと弓矢を持ったかかしを立てたりしたが、風ですぐ倒れてしまうので、今では板に「ようちえんのはたけ」と書いた立て札を立てた。この板も雨と風でみずばらしくなる日もそう遠くはない。そしてまた楽しいかかしを子どもたちと作ろうと思う。「立て札」もいろいろな話に登場するので教材であるが、「かかし」の方がずっといい。子どもたちが大きくなって、かかしこそが世界をよく知っているものだと思いを秘めることがあるかも知れない。

職員室の書類棚には「若葉菜園」という背表紙のファイルを作って年間計画を設け、作物の記録がたまって行くようにした。五月にかぼちゃを作ろうと言う計画が持ち上がった年があった。地面の上で作物が出来ていく様子を子どもたちに見せたいと思ったからである。ずっしりと重いかぼちゃを収穫することを思い描き、それにか

ぼちゃのお味噌汁は子どもの味覚に合いそうだと意見がまとまった。さて、かぼちゃはどうやって作るのだろうか。「だれか知ってる?」と言っても返事をするものはいない。いつも石灰をたのんでいる農協に電話をして、事情を聞いてもらった。親切な対応でたいへん恐縮をした。数日後にかぼちゃの作付け講習会が保育室で開かれることになった。子どもたちが帰った後、指導員の方から思ったよりも長い説明を伺った。なるほどとうなずくことばかりであった。

それからの畑の準備はひと仕事であった。子どもたちとかぼちゃを植えてから職員はいつもより朝早く出勤することになった。朝八時までにかぼちゃの雄花と雌花を交配させるためである。花に隠れるようにして小さなかぼちゃが見つかる。子どもたちとそれを目を細めてさわった。テニスボールぐらいになると交替で手のひらにのせてみた。次第に畑のあちこちでかぼちゃがめだつようになり、両手でそっと持ち上げてみたり、ペタペタとたたいて大きさを比べたり、それは楽しい観察のひとつ

となった。太陽に当たってどこもいい色になるように、ゴロゴロとかぼちゃの向きを変えるようになった頃、お礼の電話をした。私たちは言われた通りにしただけなのだが、いかにも自分たちが上手に作ったような少々得意な気分を味わった。

子どもたちと引きぬく楽しさを味わおうと思って大根を作った年もあった。たくさんの収穫に子どもも先生もお喜びで、お母さんに分けて上げられる喜びを味わった年もあった。お弁当の時にかぶの味噌汁が加わった年もあった。作物の記録は専用の場所を持っているが、なかなか上手にはたまらない。楽しい思い出の記録がたまるばかりである。

このところ小さな畑では、春から秋にかけて子どもたちとさつま芋を作り、そのあと小松菜の種を子どもたちと蒔いている。宅地化が進んで数えるほどになってしまった近所の畑で、いつもりっぱな野菜を作っている顔見知りのおばあさんが、春になると作物を籠に背負って

届けてくれる。そんな時いつも「小松菜に花を咲かしちゃあだめよ」と注意をうける。畑に精を出してない証拠という意味である。そんなこといったっておばあさん、先生ってほかにすることがいっぱいあるんですよ、なんて言ってもだめである。畑を遊ばせておくなんて「しょうがないねえ」と笑われてしまう。

摘み残した小松菜が子どもの背丈ほど伸びて黄色い花を咲かせ、子どもたちと先生がその花を摘んでクラスに飾り、やがて種が子どもたちの指のすきまに詰まる頃、そろそろ芋畑の準備にかかる。仕事の都合で時間が思うように取れない時など、春の遠足から帰って来たその日に、子どもたちが苗を植えるばかりにするために最後の畑仕事をすることもある。そんな時ばかりはせまい畑でも笑い顔をすることはできない。

芋の苗は車で十五分ぐらいの農家で毎回わけてもらう。種屋さんに紹介してもらった農家で、苗の用意が出来たと連絡をもらおうと車で取りに行く。取りに行くのはいつも私の役目である。農家の庭先に着くといつもご主

人はなにかしら用をしていて、すぐには苗をいただけない。その間じゃまにならないように庭先にある苗床や作物を見せてもらう。知らないことをひと言ふた言で教えてもらえることもある。芋を植える間隔によって収穫に違いがあることや、しおれてから植えるとよく根がつくことなど、わずかな時間で伝授してもらったことは多い。芋の苗はしおれてくると、こりゃたいへんだと頑張って根を出すそうである。

五月もおわり頃に雲の様子を気にかけて、畑の土の湿り具合をみて、ひとクラスずつ順番に子どもたちとお芋を植える。一人一本ずつ苗を手にして子どもたちは畑を囲むように集まり、苗を手にしたクラスの先生から植え方を聞く。「このお芋は縦にはうえないのよ。いい、横にねかせてうえるの。」「先生これお芋じゃないよ。」「お芋はね、これから土の中でできるのよ。このへんに。おうちでおふとんをかけて眠るでしょう。土をこうして横にほって、ねかせて、土のおふとんをかけてね。」「クラスの先生の身振り手振りとう足りない言葉でどれだけ要領が



伝わったか、説明が長いと子どもは飽きてしまう。

さっそく一列おきに畑に入り、石灰であらかじめマークをしておいたうねの上を子どもたちは掘りはじめる。苗が右を向いたり左を向いたり、とても等間隔にはならない。子どもたちがひと仕事終えて帰った後で、植え残した場所があるようだと思ってみると、苗がすっかり布団にもぐっていたりする。根付いてもらわないと困るので、どの列も点検をして必要であれば植え直してまわる。浴槽のように作られた土のくぼみに苗がそのまま横たわっていたりするところもある。となりの子どもが植え終わって席をたって行ってしまふときに、土をかき忘れて一緒に行ってしまったのだらう。夏がけのような布団に丁寧に押さえつけた手のひらの跡が残っているところもある。コレクションにしたくなるような子どもたちの思い思いの土のベッドである。様々な植え方をさせても根付くこのさつま芋の生命力は強いものだと感心する。私たちのやせた畑でもある程度の収穫をすることができるとこの作物は、ずいぶん人々を救ってきたこと

だらう。

さつま芋の苗に水をあげ、数日後に葉がピンとたつてくると、これも子どもたちにとって一つの話題である。草取りに畑にかけ、蔓がのびる様子を観察したり、こぼれ落ちた小松菜の種があちこちでいきいきと育っているのを見つける。耕作しない畑の片すみには自然に帰りたいいちごがランナーを自由にはわせ、何年も自生している。草むらの中で子どもと一緒にいちごつみをするときい調理用のボール二つが一杯になる。これからはのびた蔓をひっくりかえしたり、蜂の巣に驚かされたり、十月の収穫の季節になれば、ねずみかなにか、おなかをさせた小動物にかじられたお芋を見つけたり、子どもとの話題と小さな生き物たちの探索に楽しいひと時を過ごすことができそうである。

しばらくは自分の植えたお芋の場所を覚えていて丹精している子どももあるが、やがて夏休みになって畑から遠のき、また畑一面に茂った蔓を見れば、どれが自分のお芋なのか忘れてくれるだらう。秋にみんなで収穫する

時には同じ大きさのお芋を手にするとはできない。どの子どもも、大きさや形を比べ、自家製の天秤量りで重さ比べをすれば、みんなで同じぐらいつつ分配することに同意してくれるだろう。幼稚園で子どもたちとお芋を味わうこともあるが、家庭の食卓にまで楽しさが届く日を楽しみに思う。

大人が花のある生活環境を楽しみに準備することは、昔から子どもたちにとって一つの精神的な風土になっているような気がする。子どもたちはいま土のベッドから起き上がるうとしているのかも知れないし、眠っている

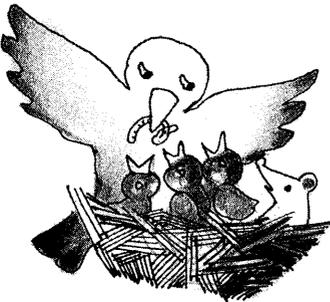
のかも知れない。やがて花に限らず植物との付き合いを続けて行くと植物のライフサイクルに気がつき、再生の季節が訪れた時にどの生き物も同じものではないことに気づく日がある。そんな時には小さい頃の植物との思い出が知らず知らず自分自身を掘り起こしていることだろうと思う。将来掘り起こすべき時代を子どもは今いきている。子どもが手続きを知らずに花をちぎることがあっても、叱ったり嘆いたりしない余裕をもって幼稚園の植物を丹精して行きたいと思う。

(川崎若葉幼稚園)

五月の子どもたち——その2

その時に

中谷喜久子



ことしのぼたんはよいぼたん

おみみをからげてすっとなん

もう一つからげてすつとんとん。

いれて

だーめ。

お山につれていくから

山には山ぼうずがいるからいや。

海につれていくから

海には海ぼうずがいるからいや。

川につれていくから

川には川ぼうずがいるからいや。

それでは〇〇につれていくから

いいよ。

中略

だれかさんのうしろにへびがいる

わたし？

いいえ

わたし？

そう。

うさぎ組（年長）へ二十名を送り、新たに十六名を迎

えて三・四歳児混合ことり組二十五名の複数担任の一人となった私はとても張り切っていました。ホールでは毎日大型箱積木が迷路と称して広げられていて、その横の空いた所では進級した子ども達が核となって「あぶく たった」や「ことしのぼたん」「おおかみさん今なんじ」をして遊んでおり、私も新入園の子ども達をささいながら一緒に遊んでいました。

五月の連休が終わったある日の事です。いつものようにホールでひと遊びした子ども達が園庭に出て行ったのでホールには誰もいなくなり、私も後から庭に行きました。日の光が暖かく、みんな思い思いの場所で遊んでいる様子に「新入園の子ども達も園生活に慣れてきて、お友だちと過ごせるようになった」と思いました。

その時「せんせいここにきてー」と呼ばれたので、右にも左にも子ども達で満員になっているシーソーの片方に割り込んで腰を下ろしました。上がったたり下がったり、左右のバランスをくずすのに大騒ぎになり、その賑やか

な面白そうな雰囲気やさそわれて次々にお友達が「いれてー」とやって来ました。膝にのったり背中にしがみついたり、それでも乗る場所がなくて「だめ」の声に、すかさず「海につれていくから」と応じ、「海にはうみぼうずがいるからいや」と掛け合いになり、自然に「ことしのぼたん」の形式でシーソー遊びが続いて行きました。私はもちろん「だ・め・よ」の側で楽しんでいました。

そこへ進級してうさぎ組になったN子が「いれて」と駆け寄って来ました。待ってましたとばかりに私達は大きな声で「だーめ」と言ったものです。急に彼女の表情が堅くなり顔色が変わりました。同じ組の女の子達が「N子ちゃん『山につれていくから』って言って」「『デパートにつれていくから』って言ったら」「好きなことを言えばいいよ」と口々に助け舟を出したのですが泣き出してしまいました。「N子さん、今ね、『ことしのぼたん』のことばで遊んでいたのよ。だから初めは『だめ』って言ったの」と私の説明も全く耳に入りませんでした。「N子ちゃん『だめ』って言うおあそびでしょ

う、」なくのはおかしいよ」。泣きじゃくりの止まらな
い彼女にしびれを切らしたように他の子たちは「一ぬー
けた」「二ぬけた」と離れて行きました。「『だめ』っ
て言われて悲しくなったのね。ごめんさいね。でもお
あそびのことばだから本当ではないのよ、わかってくだ
さいね。」私もN子の肩を抱いて話しましたがわだかま
りは解けない様子でした。シーソーの後方にあるジャン
グルジムで遊んでおられたN子の担任T先生に事情を話
して「さあ涙をふいて元気を出してね」と声をかけ、そ
れぞれうさぎ組ことり組の保育室に戻ったのでした。

保育後にT先生からN子について話がありました。昼
食が終わってから「今日遊んだ事で何をしたか、どんな
事が楽しかったか」を糸口にシーソー遊びの様子をクラ
スのみんなに伝えてもらった。それがきっかけでわらべ
うたあそびの「ことしのぼたん」をして遊んだこと、N子
も参加していたとのこと、「N子さんはお庭での事を納
得したようでしたよ」との報告を聞きました。その時私は
これで一件落着と安心し、同時に保育者間で共通理解の

あることは本当に大切な事だと思い、T先生の適切な事後の対処に感謝したのでした。ところが数か月後に痛恨の思いでこの日の出来事を顧みることになりました。

私達の幼稚園では夏休み中に家庭訪問をする事になっており毎年八月中旬に行います。N子の家庭訪問の時にT先生は母親から意外な事を聞きました。「五月頃に大泣きして帰って来たことがあった。中谷先生から『だめ』と言われた。N子の大好きな先生から何か断わられたのがショックらしくしばらく泣きやまなかった。母親としても『なぜ』と釈然としない。父親は『幼稚園に行行って聞いて来なさい』と言うのですが、一体どうした事だったのでしょうか。……」T先生はその時の一部始終をお話し、「まアそんな事でしたか」とN子の母親は笑ってしまわれたとの事でした。

T先生から家庭訪問の様子をお聞きして、私は一学期中のN子の堅い表情を思いうかべながら、その時に収めることが出来なかった彼女の気持ちが少し理解できたよ

うな気がしました。同時にその気持ち、泣くことでしか表現できなかったN子の心の痛みを理解できずにいた、私の保育者としての心のおごりを恥じたのでした。

ことり組（四歳児）のN子さん——入園式後一週間ほどたってからしばらくの間、登園時に玄関まで送って来られた母親と離れる時に泣いた・よく家庭訪問をした・A子やT子と親しくなり、その頃から幼稚園に早く登園するようになった・お家で白うさぎを飼っているのをお散歩の途中にみんなで見せて頂いた・口数が少ないと思っていたら家では幼稚園での事をよく話すとのことで見直した・縄とびが得意。——年長組（うさぎ組）になった彼女は、その時にシーソーで遊んでいるとその仲間に入りたいというよりも前の担任だった私のところへ駆け寄ったのでしょうか。「だめ」は遊びの中の友だちみんなの声ではなく、目の前の（中谷）先生から正に「来てはだめ」と拒否されたと感じたのでしょう。——その時に、泣き出した彼女に私は自分中心の解釈で接したの

でした。

あなたは遊びのことばを早合点して誤解したのよ・他のお友だちも言っているようにこんな事で泣くなんて・驚かしてごめんね、って謝っているのに、引込みがつかなくなったのかしら・これだけ説明したのだから、こちら（シーソーに乗っていた人たち）の気持ちもわかってね。——その時に、新学期で張り切っていた私は新入園の子ども達や新しく受け持った子ども達の方にばかり心を向けていて、ことり組から年長児クラスのうさぎ組に進級したN子の、うれしような不安なような、不安定な心のありように気づかなかったのでした。シーソーのそばで他の友だちと一緒にわけてわけて顔になだめずかしている先生（私）の気持ちを彼女は敏感に察して、なお更に悲しくて泣き続けたのでしょうか。「ごめんないねN子さん、あなたの気持ちが変わらなかったの。」

N子は氷が溶けるような感で担任のT先生にも、又、私へも信頼を寄せるようになりました。

この小さな出来事は、鮮明に記憶に刻まれて、以後の

私の保育者としてのありように大きく場所を占める事になりました。「子どもの心を知ることへの畏れと、共感することへの謙虚な思いが無ければ、それは理解したつもりの保育者の心のおごりになるのではないかと。」

五月の暖かい日差しを浴びると、N子の駆け寄って来た時の笑顔がまぶしく思い出されます。「ことしのぼたんはよいぼたん」と歌声が聞こえてくると、N子の一瞬とまどった表情と堅く閉ざして泣いている姿が痛みとなって私の心を引き締めます。

N子は四人兄妹、上から二番目の長女です。当園卒業生の長男J君は高校一年生になり、N子さんは中学一年生、次女のA子さんは小学三年生、そして四番目の三女のY子さんはこの春にことり組の私のクラスから、うさぎ組に進級いたしました。

（八戸市小中野幼稚園）

「保育法」講義録から 「幼稚園真諦」を読む

友定 啓子

はじめに

この講義は、昭和九年から十年にかけて行われたものです。この年、倉橋惣三は五十二歳でした。その前年の夏に、日本幼稚園協会の保育講習会で、「幼稚園保育の真諦並に保育法、保育過程の実際」と題する連続講演を行っています。それが翌年十月に、あの有名な「幼稚園真諦」として出版されました。つまり、この二つはほぼ同時期に行われたものですが、この講義のほうが「幼稚園真諦」のすこし後であるということになります。

「幼稚園真諦」はご承知の通り、倉橋の保育思想を知るための代表的なものでありますし、倉橋自身が昭和二十八年の再刊に際しても、「小さな自信は今も変わらぬ」と明言するほどのものでした。そういったことを考えあわせると、この講義は、倉橋の保育思想がほぼ形を成してきた円熟期になされたものであると言うことがで

きるかと思えます。

ところが、この講義録を読むうちに、私は不思議なことに気づきました。それは、「幼稚園真諦」のキーコンセプトとも言うべき「自己充実」、あるいは「充実指導」「誘導保育」「教導」といった言葉がほとんど出てこないことです。同時に「幼稚園真諦」では、表立って取り上げることをしなかった、あるいはむしろ奥に引込めたはずの、一つ一つの「保育項目」を取り上げていることも不思議に思われました。また逆に、この講義の中心でもある「自発の原理」「具体の原理」が「幼稚園真諦」にはほとんど出てきません。

初めは、これらのことから、この講義は「幼稚園真諦」より、以前になされたのだろうと考えました。が、事實は先に述べたとおりです。しかし、この二つがほぼ同時期に行われたものであることを考えれば、やはり何らかの関係があるはずだ、と思って間違いないと思えます。外の保育者に向かって語られたことと、内の学生に向かつて話されたこと、私はその「あいだ」に興味を持

ちました。私は、この二つを合わせ読むことによって、倉橋の保育思想がよりふくらみをもってとらえられるのではないかと考えました。

一、「自発の原理」と「自己充実」

倉橋は「幼稚園真諦」の「幼児生活の自己充実」の中で、「幼児の生活それ自身が自己充実の大きな力を持っている」ので、それを信頼して、出来るだけ發揮させていくことを保育法の第一段とおきました。

講義録の中では、「幼児の生活原理から保育原理は生れる」とし、幼児生活の最も重要な特色として、「自発性」を第一にとりあげ、これを保育にもってきて「自発の原理」としています。そして「その（保育の）結果が実に立派であっても、その方法が自発的に非ざればそれは根本原理に背いた大失敗である。」と語っています。

また「育ててやるべき自発は（中略）、子供自身の中より、生活の力が出、そして自ら動いている。」とも表現されていて、先述の「幼児の生活それ自身が自己充実

の大きな力を持っている」とほとんど重なり合うものです。さらに「真諦」の「自己充実」の中で、「心理学風に申しますならば、幼児の生活はその子供一人ひとりの自発性を重んずるということになります」と述べていることから、倉橋においては、「自発」と「自己充実」はほぼ同義に近いと考えてもいいかと思えます。

この「自発の原理」は、「教育」と矛盾するところがあると倉橋は言っています。「教育とはする方、自己が徹底したいのであるが、やはり自発的でなければならぬ」と。これは、「真諦」のあの有名な、「幼稚園の保育は、教育のいろいろの種類の中でも、特に対象本位に、実に対象本位に、計画されていくべきものである、ということ、先ずしっかり断定して置かなければならない」という言葉とつながるものと言えてでしょう。

講義の中で、倉橋は四つの保育原則を出していますが、その第一のものとして「間接教育の原則」を出しました。その中で、「直接では、小さな熱心でも自発性が心配である」とし、「意志を一杯物に含めて待つ事が肝

心である」と語っています。この「物に含めて待つ教育」とは、倉橋が、「幼稚園真諦」において、「幼稚園というところは、先生が、自身直接に幼児に接する前に、設備によって、保育するところ」と述べていることに通じます。この「設備」の力を十分に生かすためには「自由感」が不可欠であるといっています。講義においても、保育方案の前提として、この自由感に触れています。

二、「共鳴の原則」と「充実指導」

「真諦」で、倉橋は「自己充実」に続いて「充実指導」を重要視しました。「子供が自分の力で、充実したくても、自分だけでそれが出来ないところを、助け指導してやる」ことで、その子がどれ位まで求めているかを見極めることが要諦だと述べています。これは、「先生が子供の中に本当にはいりきっていないければ出来ない」といって、「外部の標準による指導でなく、相手の内部に即しての内部指導」だと言っています。

講義のなかで、第三原則として、「共鳴の原則」が出

てきます。「幼児は」自分で自分だけの心の生活を、
していけない。共鳴せられる事に依って、辛うじて子
供は生きるとも言いうる。」また、共鳴は、保母が子供
に直接なすべきだと言っています。この意味で、設備や
自由感を越えた「充実指導」を支えるものと言えるで
しょう。

倉橋は、この講義とほとんど同じ時期に、「廊下で」
と題して、小文を書いています。「泣いている子があ
る。涙は拭いてやる。泣いてはいけないという。なぜ泣
くのと尋ねる。弱虫ねえという。……随分いろいろのこ
とはいいもし、してやりもするが、ただ一つしてやらな
いことがある。泣かずにいられない心もちへの共感であ
る。(後略)」と。保育者が幼児に「共感」することの
難しさを説いています。この講義でも、「共鳴」を妨げ
る「教育意識」を指摘しています。この二つの言葉もほ
ぼ同義に使われていることがわかります。

三、「具体の原理」と「誘導保育」

自発性と並ぶ幼児の生活の特色として、倉橋は「具体
的」であることをあげています。「幼児は自分を分用す
ることを知らず。何時も自己の全体をありのままとし
て、生活させている」ので、子供を分解してはならず、
「全体」として扱わねばならぬと語っています。この考
え方は、保育項目と保育案との関係でも、何度か強調し
ていますし、製作(手技)における抽象主義、技能主義
批判にはつきりと表われています。

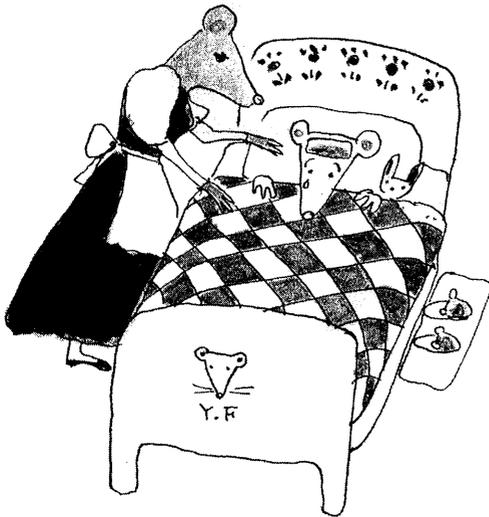
「幼稚園真諦」の「保育案の実際」においても、この
考え方が一貫して主張されています。「こちらの目的を
こちらの理屈でこねあげた保育案が、幼稚園として適当
でないのは当然でしょう。」と「保育項目」を配列した
「保育案」を批判しています。そして、「幼児生活の自
己充実に、こつちで案を立てることは難しい。また、充
実指導にもこつちで案を立てることは難しい。本当に案
らしい案が立てられるのは、幼児生活の誘導のところだ
す。」と述べ、その「誘導保育案」の主題は、子供の興
味そのものから作られてくるのだと言っています。「先

ず、生活の主題が先にあつて、その中に各々の保育内容が入ってくる」のです。ここに、倉橋の「幼児を分解してはならない」という保育原理が生きていると言えます。

四、「相互教育の原則」

この「相互」は、子供同士のことで、先生と子供のことではありません。「子供等に相互の関係で生活させておいて、その関係と云う事を狙う」ことです。これは、自発を尊ぶためでもあり、同時に具体原理を実現するためでもあると言っています。そして、これには、理論的な帰結として、「間接性」「全体性」「生活性」のすべてが含まれると倉橋は講義で力説し、「保育の本質的原則は相互教育である」と断言しています。しかし、なぜか、これに対応するものが、「幼稚園真諦」に見当たりません。しいてあげるとすれば、「保育過程の実際」の「組・分団・個」と「生活態度による分団の組合わせ」なのかも知れません。その中で、「幼稚園は全体主義的生活体ではありません」と言つて、集団の性質に一

石を投じただけに、この「保育の本質的原則」としての「相互教育の原則」の展開が含まれなかったことは本当



に残念に思われます。

五、倉橋の心理主義批判

「幼稚園真諦」とこの講義録をこのように並べて読んでいきますとこの二つはやはり、「表裏の關係」にあると言えましょう。この講義の中で説かれた「幼児生活の原理」、すなわち、「自発」と「具体」の二つの幼児の心理的特徴をつぶさずに、むしろ、生かし、伸ばしていくための教育方法を「幼稚園真諦」で、保育論として展開しているとも言えるでしょう。

ところで、倉橋は教育に学問を、特に心理学を直接持ち込むことを、極力排除していました。「幼稚園真諦」のあとがきで、「本書の語るところ、学問の説を藉りず、学者の言を引かず、ひたすら、人間常識と幼児生活の尊重との間に、当然の保育道を見出したに過ぎない」と述べていますし、また、別のところでは、「個性という問題を心理学的に考えなくても、いわゆる、保育の実際さえ正しく行なわれていけば、心理学的分類から子供

を分類したよりも、より生きたものとしてその子に接触され、自然にその子に適切な教育が行なわれていくことになるのでありましょう」と述べています。

講義では、心理学を基礎として、かなり理論的な言い方をしているように見えますが、その中でも「児童心理では、事実をどこまでも客観的に追及しなければならぬが、教育に於いては、吾々の感情を交えなくてはいけない」と語っています。つまり、心理学上の客観的事実をそのまま持ち込んだのでは、教育にならないと言っています。また、「共鳴の教育効果」を語る時にも、単に子供がうれしただけでなく、「幼児の心中には、育ててやり度くないものがある。〈略〉ここで考えれば、悪には無頓着にしてどうかして善だけを育てる方法を考えたい。その場合、悪は見向きもせず、善のみを育てる光線が欲しい。即ち伸びようとする善に共鳴を与えて、全の力で悪を殺してしまう様するのである」と語っています。客観的な事実とは別に、それをふまえてさらに教育上の願い、言うならば、教育者の感情を交え

なくてはならないと言っているのです。

六、倉橋から現代へ

「幼稚園真諦」に代表される倉橋の保育思想は、本誌読者を中心に現代まで、連綿として受け継がれてきました。そして今、新幼稚園教育要領として、よみがえった観があります。このことについては、本誌ですでに柴崎正行氏によって、詳しく触れられていますので、ここでは述べません。

私が、この講義録を読みながら、発見したことを一つだけ、述べてみたいと思います。「自発性」を妨げる理由の一つとして、「自意識」があげられていました。幼児はこの自意識がないので、あの純粹さがあるのだと。それに続く、「自意識の忘れさせねば、自発生活をさせることは出来ない。子供を褒めるといふことは、即ち幼児の自意識に訴える事なのである。促すことである。子供には、修身は教えるべきでない。」という箇所についてです。

この文を初めに読んだ時は、倉橋は変なことを言うなと思いました。普通に、「ほめることはよいことだ」と解釈して読んだので、二番目の文章は矛盾していると思ったのです。ところがどうもおかしいので、何度か読み直し、これは「ほめることは自発生活にとって、よくない」と言っているのだと気付きました。

実は、私も最近「ほめること」に疑問を抱き始めていたのです。近ごろの子供はほめられる事を絶えず要求していると、感じていたのです。そう言う自分も、子供を見ればその子と親しくなるために「何かほめなければならぬ」と感じてしまい、とても窮屈に思ったりしていたのです。そこへ、思春期になって問題を起こす子供たちの中に、「ほめられ症候群」ともいえるような「ほめられていないと安心できない子供」たちの一群がいるという事を読んだので、やっぱりと思ったのです。「ほめてはいけない」とは言いませんが、そして、ただ叱るだけの教育よりはずっとよいとは思いますが、大人と子供の関係がそこに収斂されるのでは、やはり、おかしい

のではないか思うのです。

幼稚園でも、「僕が一番」「私が勝った」といつも気にしている子がいます。そうでも言わないとまるで自分の価値がないように思っているように聞こえます。結局、評価されすぎているのでしょう。幼児の段階で、すでに

人の評価を先取りしているのです。しかも、しまつの悪いことにその評価が、相対的評価なものですから、子供同士が分断されるだけなのです。これが行き過ぎた「自意識」というものでしょう。「一番になれそうもないこと」には、初めからおりてしまいますし、ほめられないことからは見向きもしないのです。こういう子供は、「共鳴」される前に「評価」されていたのでしょうか。ほめられて初めて自分が認められたという感じを持ったのに違いありません。ほめることは外部の標準からでもできます。

これが、心理至上主義で、子供を個別の能力に分解し、目先の効果につられた保育をしてきた、私たちに對する一つの答えなのかもしれません。今一度、倉橋の言

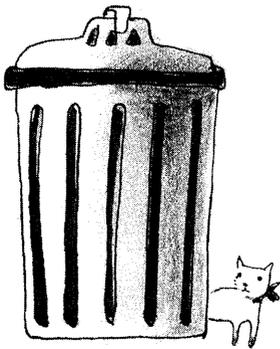
う「共鳴の原則」をかみしめてみたいと思っ
ています。そして、幼児の生活の中に「自発性」と「具体性」を再生すべく、力を尽くしてみたいと思います。

引用文献

1、倉橋惣三「幼稚園真諦」『倉橋惣三選集第一巻』フ
レーベル館 昭和42年

2、倉橋惣三「廊下で」『倉橋惣三選集 第三巻』所収
フレーベル館 昭和42年

(山口大学)



好きな色

松井 とし



嫌いな色は厳然とあるのだが、好きな色を特定することは難しい。色の美しさは、組合せによって生み出されるものであろう。

ひとくちに赤といっても、朱に近いものからピンクに近い赤まで、何種類もの色が存在する。それぞれの微妙な色合いが、さらに他の色との組合せによって動き出す。それ故、色にはこだわりを持っている。

しかし、子どもたちをとりまく色は、みな調和を欠いた原色である。ブロック、砂場遊びのジョーロ、スコップ、ままごとの器。プラスチック文明がもたらした、一種独特な色である。

大人社会が作り出し、無防備な子どもに与えるものは、質を問題にしていけないように思

われる。『子どもだまし』等という言葉が存在する社会である。

幼稚園という、子どもが生活する場の環境を作り出している色は、そこで行われている教育の質を表していると言ったら言いすぎであらうか。

たとえば、ガラス一面に毒々しいピンクの桜の花が一年中貼ってある幼稚園。色の調和など考えもしないで、折り紙で作られた飾りものが壁面をいっぱいにしてある保育室。そういう場に一步足を踏み入れると、いろいろな色が眼にとびこんできて、私は息がつまりそうになる。

ある時こんなことがあった。つねづね、教材屋さんの絵の具のひどぎに辟易としている私は、画材屋で舶来の水彩絵の具をたくさん買って来た。水の中で次々生まれ出る美しい色に、子どもたちは感嘆の声をあげた。そして、同じ黄色にもいろいろな色があることに興味を示した。コンテで描いた上に筆を置くと澄んだ色たちがマッチして、私たちはみな、落ちついた幸せな気分になった。

私は、子どもたちにもいつも本物を見せ、聴かせ、そして与えたいと願っている。勿論、その先で何を選ぶかは、その子どもに任せられるべきであるが……。みずみずしい感性を持つ子どもたちにとって、出会いは『一期一会』の重みを持つ。

(元神奈川県立横浜幼稚園)

大人と子供の かかわり見聞録

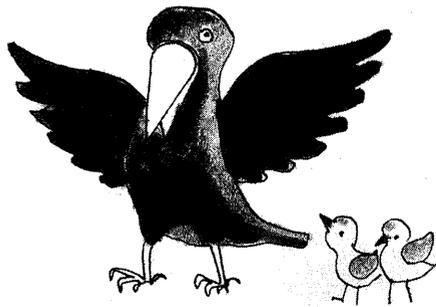
大多和 檀

〔その1〕

子供が三人——兄・姉・妹と思われまます——プールで遊んでいます。お兄ちゃんはず中メガネをしています。お姉ちゃんと二人で何やら楽しそうに潜ったり、追いかけてっこをしたり。水中メガネは二人で使っています。はじめは二人にそって動いていた妹（四歳位）が二人から離れてプールの縁につかまりました。兄姉に背を向けて。ずっとそこにいます。

で、上にあがりたいのにあがれないのかと心配になってきました。でもお母さんはプールサイドの寝イスで本を読んでいます。

十五分位たった時、お母さんはプールに入り静かに妹の所に来ました。そしてその場でそっと抱きあげました。よしよしという感じで、背中をなでながら。しばらくそうしてから抱っこしたままプールサイドにあがってきました。二人で何やらお話しして



います。その様子を兄姉は時々見ていました。五分程たつと妹は再びプールに入りました。するとお兄ちゃんが妹に水中メガネを貸してあげたのです。三人で潜ったりふざけたりが始まりました。お母さんは本を読み始めます。妹は水中メガネを貸してもらったのでしよう。

とても嬉しそうな顔をしていました。しばらくするとお兄ちゃんに水中メガネを渡し、遊びは続きます。

〔その2〕

生後十か月位の赤ちゃんを抱いたお母さんがプールに入って来ました。初めての体験らしく、赤ちゃんは固い顔をしてお母さんにしがみついています。お母さんは、少しずつ少しずつ水の中に赤ちゃんを入れます。赤ちゃんがしがみついて来ると身体を水から引き上げます。何回かくり返すと、赤ちゃんは手をバタバタし始めました。お母さんは、赤ちゃん

の抱き方を変え、バタバタしやすいようにしたり、手を伸ばした方へ進みます。これも何回かやると、今度は水の上の方へざっと抱き上げました。新しい事で赤ちゃんの顔が引きつります。そうするとお母さんはやめます。また、バタバタをやらせています。再び高い高いをやると赤ちゃんは笑いました。お母さんは数回高い高いをやってあげています。こうして十分位たつとお父さんがやって来ました。「赤ちゃんがこんな事したのよ」と嬉しそうな顔で話すと、赤ちゃんをお父さんに渡し、お母さんは気持ち良さそうに泳ぎ始めました。お父さんと赤ちゃんはプールの中でそれを見えています。ひと泳ぎしたお母さんは、再び赤ちゃんを抱き取り、三人ともプールサイドに上がりました。

〔その3〕

電車の中で男の子（七歳位）が「買ってよ」「今度は買ってくれるって言ったじゃない」「どうして

買ってくれないんだよ」と言い続けながら泣いていきます。お母さんは少し離れた所に立ち、「いいかげんに泣きやみなさい」「あなたもしつこいわね」「恥ずかしくないの」と、イヤな顔をして言っています。だが、そのうち黙ってしまいました。男の子は少しも泣きやまず「なんでだよ」「なんか言っつてよ」と泣きながら言い続けます。母「お父さんに聞いてから」子「なんでもお父さんに聞きなさいって言うんだもん」「お母さんに聞いているの」

十駅過ぎる間中泣き続け、言い続け、お母さんは外に視線をむけ続け、その状態のまま、電車から降りていきました。

〔その4〕

ホームで女の子（五歳位）が何か言いながら泣いています。電車が来て、お母さんは、子供を座席に座らせると、その前にしゃがんで、子供の顔を見ながら何か話して聞かせています。女の子が言葉をは

さむと「まだ」と言う様に子供の口を押さえ、お母さんは話します。終わると、子供が泣きながら話し出しました。お母さんは顔を見ながらよく聞いています。そして又お母さんが少し話すと、女の子は泣きやみました。お母さんは立ちあがってニコリ笑いかけました。

〔その3〕の親子は電車を降りたあとどうなったでしょう。きっと「電車の中であんなに泣いて」と怒られたことでしょう。何も大人から応えてもらわないうままに、何も解決しないままに。

〔その1〕のお母さんは、兄姉には何も言いませんでした。妹にも、そっと背中をなでて抱いてあげただけです。でもお兄ちゃんにはメガネを妹に貸してあげました。妹も満足しました。

〔その2〕のお母さんは、赤ちゃんにそって動いて決して無理はせず、赤ちゃんも満足、お母さんも満足していました。

「その4」は、お互いに話を真剣にし、きちんと大人の話の子供に聞かせています。お母さんは問題を避けていません。

「その3」のみ日本人の親子で、あとは外国人の親子でした。

「人の振り見て、わが振り直せ」です。

大人として、自分の生活を確立しているか、自分の生き方をしているかが、子供へのかかわり方に大きく影響しているのではないかと思います。

お父さん、お母さんが、二人の生活をきちんと持つているか。保育者自身がどのように友達とのかかわり、職場内での人間関係をもっているか。

お父さんは仕事に忙しく、お母さんも何かと忙しく、保育者は自分の時間も持てない程忙しく、こんなに忙しい大人にかこまれた子供達。こんなに忙しい大人に、自分の生活、自分達の文化が持てるはずがありません。

子供達には基本的には「土」と「太陽」と「水」と「時間」が必要、というのが、私の持論ですが、今や、大人にも「土」「太陽」「水」「時間」が必要なのだと思つづく思います。

「土」「太陽」「水」をもとめて「時間」を使うことが、今のところの私の夢であり、私の保育かもしれません。

(港区立港南幼稚園)

おもちゃを通しての人間形成についての一考察

— 新しい造形素材としてのブロック玩具の取り組み報告 —

芸術教育研究所 おもちゃ研究室

◆はじめに

ヨーロッパには古くから、フレーベルの恩物、モンテッソリーのシステム教具といった乳幼児のための教育玩具が、伝統的に根づいていた。

しかしこれらは、抽象的なひな型を使って子どもたちに識別と認知の訓練をおこなうものなので、まわりのあらゆる現実を知覚し、再生する力をつけるまでには、およびないのではないだろうか。

ところが、平行六面体のブロックは、そのシンブルな形状を単位として、無限に組み合わせることが可能であ

る。そこに目をつけ、色彩・形状の無限の組み合わせが、子どもたちのまわりのあらゆる現実を再生させるのではないかと考え、研究をはじめた。

その結果、平行六面体一形状だけからで、球・円柱・円錐といった形状まで表現させることも不可能でないことがわかった。

つまり、子どもたちのまわりのあらゆる現実を再生させるには、平行六面体一形状（ただし、はめこみ式ブロックとなっているもの）で十分できることを、私たちは実証していると思う。

ただし、ほかのあらゆる素材や教具のよさも認め、ドッキングさせた利用を研究し、よりいっそう多面的に利用していくことも、たえず念頭においている。

◆研究報告

平行六面体ブロックを素材としてみることによって、これまで家庭の組立玩具として、あるいは集団活動の中でも自由あそびの一教具でしかなかったブロックの、活動のはばを大きく前進させることができた。その内容については後に実践報告として述べることにして、まず、素材としてみたときの、位置づけと特徴を明確にしている。

1、他の造形素材との比較による素材の特徴の明確化 〈表—1の考察〉

形による素材の分類をしていくと、点材・線材・面材・量材の四つに分けられる。プラスチック製平行六面体ブロック（以下ブロックと称す）は、一つ一つを単位と

してとらえれば点材となる。長くつないでいけば線材に、平面状に積めば面材に、そして、立体的に積んで、量材としての使い方もできる。

点が集まって線になり、線が集まって面になり、面が集まって量になるという理論にそって、ブロックはまさに、点が集まって線→面→量を構成している。しかも、一定の大きさの単位をもとに出発しているため、線も面も量も、単純な構成システムでできる。

それに比べて、例えば粘土では、点・線・面・量の形態はとれるが、点からの出発は、とくに一定の単位が明確に決められていないので、可塑の範囲が無限であり、つくり手の能力で大きく左右されてしまう。

また、例えば点材の一つである木の実を、線材であるひごにさして立体化していくものを例にとってみても、木の実だけでは線が構成されにくく、ひごだけでも面が構成されにくい。

ブロックは、一定の単位でできている。これのみで、あらゆる平面と立体が容易にできる。これは、造形素材

〈表-1〉 形と可塑性による素材の分類

可塑性 形	可塑性のある素材	半可塑性のある素材	可塑性のない素材
点材	おがくず、もみがら 砂、粘土	木の実、豆	小石、おはじき、ビー玉 ボタン、マカロニ、貝がら 平行六面体ブロック
線材	粘土	糸、ひも、なわ、テープ ひご、マッチ棒、わりぼ し、きびがら、木の枝	針金、パイプ、くぎ、 平行六面体ブロック
面材	粘土	紙、布、木板、芝生	金属板、ガラス板、タイル プラスチック板 平行六面体ブロック
量材	水、砂、粘土、綿、雪	木片、石けん、れんが 竹、あき箱、缶	石こう、びん 平行六面体ブロック

〈表-2〉 ブロックを使った場合の用具や立体化への手だて

用具等 素材	材料の種類	用具	付随用具	立体化への手だて	いろいろな工夫
ブロック	ブロック		紙 鉛筆など (設計図)	ブロックを組み合 わせる 立てる	作る順序を考える つり合いを考える まるみをつける

〈表-3〉 粘土を使った場合の用具や立体化への手だて

用具等 素材	材料の種類	用具	付随用具	立体化への手だて	いろいろな工夫
粘土	土粘土 陶土 油粘土 ゴム粘土 硬化粘土 紙粘土 小麦粉粘土	粘土板 粘土ベラ 粘土貯蔵が め	めん棒 水入れ 水道(水)	ちぎる、のぼす、 まるめる、たたく くっつける 型に押し 掘る	粘土ベラを安全に 使う、粘土ベラを 計画的に使う しんぼうを入れる 物をつきたてる

〈表-4〉 紙を使った場合の用具や立体化への手だて

用具等 素材	材料の種類	用具	付随用具	立体化への手だて		いろいろな工夫	
紙	画用紙	手	糸	切	ちぎる	のり付けに使う指を決める	
	和紙	はさみ	ひも		やぶく		
	中厚紙	カッターナイフ	わりばし		はさみで切る		のりがかわくまで
	色紙	小刀	クリップ		ナイフで切る		押さえる
	両面色違い 中厚紙	ものさし	えんぴつ		直線を切る		くりぬく、もむ
	上質紙	コンパス	サインペン	曲線を切る	展開図をかく		
	色画用紙	三角定木	絵の具	折	折り曲げる	のり代を工夫する	
	うす紙	化学接着剤	皿		山と谷に折る	紙の性質を生かす	
	色セロファン紙	のり	鉄筆		幅をきめて、折る	色をぬる	
	包装紙	セロハンテープ	裁断機 等			作る順序を考えて作る	
	クラフト紙	ビニールテープ				つりあいを考える	
	新聞紙	ホッチキス	はと目パンチ	（曲丸げめるるる）	カーリング	まるみをつける	
	段ボール紙	はと目パンチ	目うち		円錐を作る	はさみやナイフを上手に使う	
	アート紙	目うち	わりピン		円柱を作る		
	ケント紙	わりピン	ガムテープ	（つなげる）	角錐を作る		
方眼紙	ニス 等	ニス 等	角柱を作る				
あき箱 等							
				そ の 他	組む あむ 立てる ささえる 穴をあける		

〈表-5〉 その他の素材を使った場合の用具や立体化への手だて

用具等 素材	材料の種類	用具	付随用具	立体化への手だて	
布	木綿、絹、麻 化学繊維 混紡、混織 維	糸、針、綿 小豆等詰め物	リボン、 毛糸、鈴 ボタン	ぬいぐるみ	針と糸で縫い合わせて 中に綿などをつめる
				積木 お手玉	積み上げる
金属 板	穴のあいた 金属の部分 玩具	ボルト ナット ねじまわし	/	金属板どおしをボルトとナット でつなぎ合わせていく	
	紙状の板	はさみ接着剤	/	紙と同様に立体化していく	
	アルミハク	/	/	丸める	
砂	砂	水	バケツ シャベル	水をまぜてくずれない程度のかた さにし粘土と同様に形作っていく	
木	木工用の木 片	接着剤 のこぎり	くぎ かなづち 木づち ペンチ等	組み立てる	
	積木玩具	/	/	積み上げる	
	彫塑用の木 片	彫刻刀	のこぎり と石	けずっていく	
	穴のあいた 木の部品玩 具	ボルト ナット ねじまわし		木片どおしを木製のボルトとナ ットでつなぎ合わせていく	
れんが	れんが	/	/	積み上げる	
あ き 箱	あき箱 (工作)	接着剤 はさみ ナイフ	紙と同様	積み上げたり切ったりはったり しながら組み立てる	
	あき箱 (積み上げ)			積み上げる	

としてすぐれたものである。

〈表12-5の考察〉

粘土は、量や立体に対する感覚をやしない、構成・つりあい・動き・形の理解に適している。可塑性があり、形を考えながらつくりやすく、また紙と違って、基本的技法も少ないため、「動きとつりあい」を考える立体表現にむいている。しかし粘土は、粒子を細胞とした教具であり、可塑性が無限に広がるという点、が逆に、つくり手の能力に左右され、むずかしい表現素材となる。

紙は、その種類の多様さから、形・色の美しさ・質感・量感の表現が、奥深く複雑である。そして、多くの用具の使い方も習得していかなくてはならない。はさみやのりの使いかたは、小学校低学年までには身につけさせるようになっていく。使用技法を身につけると造形活動を、同時におこなっていくことは、きわめてむずかしい。紙は平面を細胞とした教具であり、低年齢の子どもは、「立体化」Ⅱ「立たせること」に集約しがちであるが、高年齢になってくると、平面から立体化に紙工作

のおもしろさ・楽しさを味わいながら造形化することができる。

その他の素材として、布・金属板・砂・水・レンガ・あき箱をとりあげて比較してみた。

布の中でもぬいぐるみは、装飾や形の工夫しだいで、具象的にも抽象的にもつくられるが、手間がかかり、低年齢の子どもには容易ではない。

布の積木やお手玉での積み上げ活動は、軽くて感触がよいが、積み上げてもくずれやすく、単純な活動しかできない。

金属板の中でも穴のあいた金属の部品玩具は、ボルトやナット・ねじまわしを使うこと自体にも興味ももてるが、用具の使いかたを習得していくのを前提にした活動である。

金属の紙状の平板は、紙工作と同様、色が選択でき形も多様性をもつが、用具の使いかたを習得していくのを前提にしている。

砂は、感触がよく手軽に何度でもつくり直せるが、細

かなものまでは表現しきれず、また、砂場などのような、活動の場所が限定される。

木の中でも木工は、構成の学習としてすぐれていて、色もあとから自由につけられるが、用具の使いかたを習得していくのを前提にしている、部屋をちらかすのも難点である。

木の積木玩具は、木の肌ざわり独特の感触のよさはあるが、積み上げてみずれやすく、単純な活動しかできない。

木を彫っていく活動は、かなりこまかい部分までの表現ができるが、やり直しがきかず、部屋をちらかすという点がやはりある。

穴のあいた木の部品玩具は、ボルトやナット・ねじまわしを使うこと自体にも興味ももてるが、用具の使いかたを習得していくのを前提にしている。

レンガは、積み上げる活動として安定はしているが、型が大きくて扱いにくいものである。

紙の中にも入るが、あき箱は原形が立体となっている

ため、とくべつとりあげて比較してみると、紙工作のように接着剤・はさみ・ナイフなどを使った場合は装飾により、かなりこまかい部分まで工夫でき、表現できるが、紙工作と同様に複雑な活動である。

箱を積みあげるだけの活動は、材料も手軽に手に入れられるものでよいが、積木と同様、くずれやすく単純な活動、その場限りの活動しかできない。

このように、いろいろな素材の比較をみていくと、それぞれに特徴があり、その特徴を生かした指導がたえず研究されている。

そもそも素材とは、指導する目的と内容に合わせて選択していかねばならないが、その姿勢が今の私たちの教育に根づいていないと思われる。

主題が決まったら、それに適する題材を選び、それから指導内容をつめていく——そしてそのあとに、表現する素材を選択していくのが、教育の最低の筋道である。

このように、素材の比較をみていくと、それぞれに特

徴があるわけであるから、私たちはなにもブロックばかり使おうというのではなく、これを一つの手がかりとして、さまざまなものとの比較から、さらによい教具や素材を見つけていく姿勢が大切なのであることを感じ、提案するわけである。

しかし、ここで一つうちだしておきたいことがある。

日常生活に使っているものを見まわしてみると、きわめてハードなものが多いことに気づく。たとえば、ドアのとっ手・食器・机・いすなど、かたいことがわかる。しかし、私たちが意図的に与える教具や素材には、水・砂・どろ・粘土・布・紙など、やわらかいものが多いと思う。日常生活と結びつけ、もっと積極的に可塑性のないハードな素材をとりあげていってもよいのではないだろうか。可塑性のないハードな素材として位置しているブロックを、とりあげてみた理由がまずここにある。

しかも、表―4を見てもわかるとおり、素材そのものは、余計な用具も手だても省かれたごくシンプルなもの。他の素材と比較して大きな特徴と考えられる。

2、ブロックを使った造形活動の主なる造形課題

ブロックを素材とした造形活動をおこなう場合の、系統だったカリキュラムをうちたてることができた。ここに掲げたものは二〜五歳児のものであるが、この年齢でもっともベーシックな部分をおさえておく必要があるため、ここでは二〜五歳児に焦点をあててみた。これらを基礎として題材と指導内容を発展させていけば小学生の活動となる。なお詳しいことは造形指導12ヶ月（黎明書房刊芸術教育研究所編）を参照のこと。

教育集団の中で、いかに一人一人の個性をみつけだし、かつ多くのなかまから吸収し成長させていくかを、一つの教具（ブロック）をとりあげて考察していった結果、次のような指導展開の方法をうちだすことができた。

この展開をおこなうことにより、造形活動としての課題が、無理なく子どもたちになせ、また、楽しいコミュニケーションをもちながら、共同作業ができること

〈表-6〉 2歳児のカリキュラム

月	主なる造形課題	題材
4月	2色の区別をする	仲間集め
5月	両手の指先に力を入れて、ブロックを押しこむ	電信柱
7月	長さの比較をする	長い橋
8月	高さや形を考へて組み立てる	トンネル
9月	わく作りをする	おうちごっこ
11月	かたまりをとらえる	動物
12月	線にそつてまっすぐ並べる	迷路のゲーム

〈表-7〉 3歳児のカリキュラム

月	主なる造形課題	題材
4月	色と大きさの認識をする	仲間集め
5月	両手の指先でブロックをつまみ押しはめこむ	壁かざり
6月	ブロックを立った時の目の高さより高く積む	高いもの
7月	ブロックを丈夫に長くつなぐ	長い橋
8月	ブロックを互い違ひにはめてくずれない立体を作る	電車
9月	わく作りをする	おべんとう作り
10月	大きさの違ひのある空間を理解する	遊園地
11月	かたまりと細長い部分の組み合わせで立体を作る	動物
12月	基礎板を使わずにわく作りをする	スーパーマーケット
1月	1対1の対応を理解する	競争
2月	大小さまざまなブロックを利用して面構成をする	陣とりゲーム
3月	木とブロックの特徴を比較する	3匹のくま

〈表-8〉 4歳児のカリキュラム

月	主なる造形課題	題材
4月	色・形・大きさの認識を定着させる	仲間集め
5月	両手の指先でブロックをつまみ押しはめこむ	モザイク模様
6月	ブロックを互い違ひにはめて高く積む	まほうの塔
7月	ブロックを丈夫に長くつなぐ	長い橋
8月	ブロックを丈夫にはめる工夫をして平行六面体を作る	電車
9月	わく作りをする	おふろ
10月	細かい部分で丈夫にした造形を行う	遊園地
11月	動物の特徴的な構造をふまへ複雑なかたまりをとらえる	動物
12月	限られたブロックで大きさの予想をもつた造形化をする	街作り
1月	1から10までの数をブロックを通して知る	競争
2月	線による意図的な平面構成をする	迷路ゲーム
3月	粘土とブロックの特徴を比較する	森の動物たち

〈表－9〉 5歳児のカリキュラム

月	主 なる 造 形 課 題	題 材
4月	色・形・大きさの弁別をする	片付け競争
5月	三方面を囲んだわく作りをする	絵本たて
6月	上に積むことにより、量感のある立体を作る	ビルの町
7月	ブロックを丈夫につなぐ	いろいろな橋
8月	色と形を工夫して、量感のある立体を作る	電 車
9月	わく作りの応用として細かい部分を工夫した立体を作る	外国の街
10月	動かせる乗り物を中心に造形化する	遊園地
11月	動物の特徴的な構造をふまえ、動きを感じさせるかたまりを作る	動物の国
12月	わく作り、家作りの応用として色彩を十分考慮した造形をする	街作り
1月	ブロックを通して数の多少を把握する	競 争
2月	ブロックに神経を集中させ、指先のコントロールをしかりする	ゲ ーム
3月	ブロックを自由自在にコントロールして扱い、グループ内のイメージを相互的に広げた造形をする	もうすぐ1年生 (お話づくり)

〈表－10〉 指 導 展 開

順序	指 導 内 容	
1	興味をもたせる	事物とのふれあい 表現することへの必然性をつくり、あそびを通して生活の中でとりくませる
2	見せ方をどうするか	事物とのふれあいの組織化 題材が身近に感じられるよう大まかな再現をする
3		事物の観察 具体的な鑑賞教材を用意して、造形認識を深める言語活動を行う
4		比 較 構造・機能面の違いがはっきりわかるように、他のものと比較をする
5	造形化への手だて	大きさ、構造・空間関係のイメージ作りをして設計図や完成予想図をかく
6	表現の準備と確認	必要な色を決め、材料を選択する
7		製作活動 ブロックによる製作活動を行う
8	相互評価	表現内容確認のための集団での話し合い 他人の作品からも同じように読みとらせていく
9		話し合いからの再表現を展開 つけ加えて行う
10	次の作品への発展	話し合いを重ねる 次の表現へ結びつきをもたせるために、作品をどう生かすか話し合い、作品を利用してあそびへ発展させる

と思う。

これをうちだしたことにより、ブロックが今まで家庭の玩具であり、また教育集团で使うとしても、自由あそびの教具としてしか見られていなかったものが、集団で活用できる教具であり素材であることが明快になった。幅広い活用ができるものとして、その地位を前進させたのである。

◆まとめ

まとめとして、三つの観点から見たブロックの特徴を整理した。そして、人間づくりのための教材教具としてとらえるために、今、私たちの考えている取り組みの方向を提案し、しめくくりとしたい。

1、ブロックの特徴

(1) 教育的観点から

幼児から小学生までの多くの実践をみると、実にいきいきとした活動がみられる。家庭でも身近に使った

ことのある組立玩具として、親しみをもち、リラックスした雰囲気での授業が、自然にかもしだされている。

生き生きとした学習、自主的な活動は、受け身の多い今日の学習体制の中で、貴重な方向であろう。

(2) 造形的観点から

① 平行六面体を単位としたブロックはち密な計算による造形化が可能で、粒子の細胞的な教具である粘土に比べてより単純な活動ではあるが、かえって美しい線の造形が可能である。

② 点・線・面・量材として幅広く利用できる。すなわち、一つの単位からあらゆる平面や立体をつくることができるのである。

③ 彫刻のようにけずってしまおうと取り返しがつかなくなるというのではなく、はめはずしが自由で、何度でも直せる。

④ 一定の単位のを組み合わせていくだけの活動で、紙工作のような複雑な動作がなく、用具も不用であり、誰でも容易に取り組むことができる。

(3) 生活科学的観点から

① 他の用具がいらぬ。

② 部屋を汚さず、準備や片づけに時間をとられない。
い。

③ 耐久性があり、ほとんど消耗せず、作品をこわしてまた使うことができるので、素材でありながら教具として半永久的に使用できる。

④ 環境に左右されない。すなわち気温・湿度の変化、四季の変化、屋内や屋外、海辺や山など場所の変化にも全く影響されず、乾燥したり変色したりすることがない。

2、これからの教具としての方向づけ

今までは家庭での個人の玩具として位置していたブロックであるが、これからは教育集団での教材・教具としても、その位置をかためていくことと思う。

そしてさらに、子どもたちの教材・教具の域にとどめずに、大人の教材・教具として、障害者への教材・教具

として、改良を加えれば色彩教具としても適用するものとなり、人間そのものへの大きな幅をもった教材・教具としてとらえることになるであろう。

これをまとめると、次のようになる。

(1) 今までの柱 家庭での玩具材(個人)

(2) これからの柱 集団での教材・教具(集団)

(3) 新しい柱 大人の教材・教具

障害者の教材・教具

(色彩の教材・教具)

←

人間づくりへ

◆おわりに

私たちはこれまで、新しい造形素材としてとらえたブロックを、教育集団における実践レポートを切り口としてみていくことにより、造形素材としての役割ばかりでなく、人間形成にも大きな役割をもっていくことを確信するにいたった。

どちら
も必要

そして、今研究しているものは、障害児における取り組みである。障害児の生活の幅を広げるための切り口として、あそびの幅を広げさせようというものである。その手だてに、ブロックを継続的に与えて利用させている。

素材の活用の無限性が、あそびの無限性へほんとうに通じるものなのか、そして、そのあそびの無限性が、生活の幅を広げることになるのだろうかということ、調べていきたいと考えている。



公園での活動は、外の空気を吸う、体を動かす、ハトなどの小動物と接する、などで、すでもう盛りだくさんの楽しみができ、かけっこをしても砂場で穴ほりをして、母親との交流の楽しさに満足して過ごしていたように思う。

二歳前後の頃、体を動かして遊ぶことが楽しくなってきた頃だったと思うが、水のない池のへり（高さ30センチ、幅15センチほどの平均台の上をそりそり歩いていくのと似た感覚）を、ぐるぐると私と手をつないで渡り回ることに凝っていた時期があった。しばらくして、自分だけで渡り歩けるようになったのだが、この渡り歩きは、同年代の子供達にもなかなかの人気で、晴れた日には必ず、同じ遊びをしようとする子供もみられた。祐子は、自分の後ろから自分よりも大きい子供や動作の早い子供が追いついてくると、押されたり、つかれたりすることへの恐怖からか、必ず一回おりて、やりすごしてから、また登り、自分のペースで歩きだすという風であったが、自分の前数メートルに子供の姿があるとはり

きって距離をちぢめ、相手がスピードをあげると、また懸命に追いかけて追いつくことに熱中するようになった。そのうち、祐子に追いかけられ、後からついてこられることを期待する気持ちが湧いてきたその子供は、距離がひらくと速度を緩めて待つようにして追いつかれるのを期待している。祐子は、頬を紅潮させて、追いつくことに夢中になっている。そしてやっと追いついた時、そのお友達は、祐子にむかってにっこりと笑いかけたのである。祐子の嬉しそうな満足そうな顔。次の日から、祐子はこのすばらしい出会いの遊び場で、出会う相手は日ごとに違っているのだが、新しい友達との出会いを求めて、追いかけてごっこを自分からもちかけるようになっていった。体と体を通して友だちのつくり方を、同年代の子供から、教え伝えてもらった、すばらしい一場面だったように思う。ことは交流の全くない時間の流れの中で、二人の子供の心がふれあったということも私は驚異な感動的なことだった。私のことばに訳しなおすなら、「私、初めて友だちのつくり方がわかったよ。」

という祐子の叫びがきこえてきそうである。人のすることをまねてみる、同じことをやってみて相手と心を通わせようという発想が、それまでの私にはあまりなかったこともあって、この幼い子供達は、私にはできないことを発見し、身につけていったようで、何かまぶしいような感じさえしたものでした。

二、「それでもTちゃん大好き」

祐子には、地域での出会いとは別に、彼女より一か月あとに生まれたT君という同年の従兄弟との交流がある。大人の都合で、週一度、半日〜一日間、一緒の時間をすごすのだが、これがまた、娘・祐子にとっては得がたい時間なのである。しかし、二歳位までは、大人の橋わたしなしには一緒に遊ぶということもほとんどできなかった。ただ、一方がどこかに這い始めると他方も後をついていくとか、気にいった家具の金具を二人でいじって楽しむ、程度の自然発性的な変流は見られた。あとは、おもちゃの取りあい、貸し借りの問題が多発し、T

君の方は、自分が使いたいものが自分のもの、として行動し、祐子は自分のものは自分の自由に使いたいとして行動するところからくい違いが生じ、そこでのトラブルの調整が多かった。Tちゃんよりも一か月早く生まれた祐子に対しては、Tちゃんに譲ってあげるように説得も多くなってしまったが、そのような経験を経て、祐子は、自分のものと、他人のものをはっきり区別する意識は高くなったようである。好ましい面としては、他の人のものには決してだまってさわったり、使ったりしないという態度、逆の面としては、「他の子に使われるから公園の砂場におもちゃを持っていきたくない」というような保身的な態度とである。

とにもかくにも二歳も後半になってくると、二人の間にことばで交流する場面も少しずつ出てきて、一緒に出かけよう、一緒に遊ぼう、一緒に食べようと誘い合う場面が多くなり、一緒に行動するために、靴をはかせ合うというような予想できなかった事態まで見られるようになった。「Tちゃん、大きくなってきて、やさしくなっ

てよかった」と、祐子は嬉しそうに口にするようになった。電車に乗って出かけたり、レストランで食事をしたり、何か自分にとって楽しい経験をする時、「今度はTちゃんも一緒に連れていきたい」という祐子にもなってきた。種々の葛藤を経て、確実に、他者を受け入れる心が育ちつつあることを頼もしく思う次第である。

三、「自分が」「自分で」「自分の」の多発

祐子が、「自分の物」に強くこだわるようになった様子については、前項で少し触れたが、自分の物に対する態度について、従兄弟のTちゃんと祐子の間に興味ある違いが見られるようになってきた。一、二歳代で、祐子の使っているおもちゃでも、自分が欲しければ奪い取って使っていたT君なのだが、二歳も後半にはいって、自分のおやつのお菓子を、家族や居合わせた大人たちに気前よく分けて、自分の分が少なくなってもあまりこだわらないで分けあったことを喜んでいう風である。祐子の方は対照的に、「私の分が少なくならない?」「私

の分がなくなっちゃうからもう分けない」と自分の所有に強いこだわりをみせている。

祐子については、性格的に欲深なのではないかと思える向きもあるのだが、彼女の生活全般を見わたすと、物に対するこだわりだけでなく、自分でやりたい、自分がやりたい、という自我をめぐる欲求の強さも相当強く表現されてきていることに思い当たる。

一歳代から、手づかみでも何でも、自分で食べたい、食べさせてもらいたくない、という面はあったものの、二歳代になってからは自分で歯をみがきたい、自分でボタンをはめたい、自分で着がえたい、自分で排泄のすべをとりしきりたい、など、少しずつ生活習慣を身につけるに従って、おとなの助けを借りるのをいやがるようになってきた。特に、自立を要求するような環境づくりをしている訳でもないのに、子供が自分で成長しようとする力、できるようになりたいと挑戦していく姿は、大変に原始的な、根元的なものなのだろうと思わせられる。

又、祐子は、自分が多少欲ばりな子供であるらしいことを、意識するようにもなってきたており、おやつを食べる前に、愛着の深いぬいぐるみの動物たちを自分のまわりに並べ、自分が食べる前にひと口ずつ食べさせるまねをしてから自分の口に入れ、「祐ちゃんに分けてもらおうと嬉しい?」「祐ちゃんに分けてもらったね」等、話しかけて満足していたりする。精一杯の自我を主張しながらも、他者への愛情の芽ともなるものを、少しずつ自分の中に育てていることを感じさせられる一場面であった。

四、絵本の世界での出会い

祐子と絵本との初めての出会いは生後六か月、ちょうど腰がすわっておすわりができた頃だった。「いないいないバア」の遊びを喜び、自分でも、ハンカチをあげ下げして、この遊びを楽しんでいた頃である。一番最初に用いたのが松谷みよ子著の赤ちゃんの絵本の一冊『いないいないばあ』次に安野光雅の『いないいないばあ』のえ

ほん』だった。親子でやっていた、いないいないの遊びを、さらに視覚的な印象を借りて、身近な動物やら、さらに絵本そのものへの興味を持つところまで世界が広がられたら、と考えた。絵本を使つてのこの遊びも充分に楽しんでから、同じく松谷みよ子赤ちゃんの絵本シリーズ『いいおかお』『みんなねんね』『ブルーナの0歳からの絵本シリーズ』を使つてみた。一歳前後の頃である。保健所の指導では、八か月頃からは絵本も積極的に使つてみましようといわれていた。やはりおすわりのできるようになる頃がめやすと思われる。二歳ごろまでにかけて使つてみて印象に強いものをあげてみたい。

①ブルーナ0歳からの絵本シリーズ8冊

たいへんに視覚的に訴える力が強い。原色の二、三色を使い、一頁にひとつのものが描いてあり、身近な動物や道具がとりあげられている。最大の特徴は文字が全く書いていないことで、使い方はすべて読者に任されている。祐子の場合、興味を持っていった順番は、食べ物、動物、身につけるもの、遊具や家具などで、眠る、

遊ぶなどの行動や生活に関する絵に対する興味は、前述の物に対するのよりもかなり時間的なおくれがあった。やはり、実生活での体験と重なり合って、絵本に対する興味も出てくるのだと思った。

絵につながる最も簡単な歌を選んで歌いながら、絵本を見るのが楽しいという印象づくりを心がけた。例えば『はとぼっぼ』『ぞうさん』などである。それまで子守歌や、あやすための童謡等、どちらかといえは一方的に歌ってやっていたという傾向が強いが、絵本を仲立ちとして、祐子自身もパチパチと手をたたいたり、もぐもぐと口を動かして自分も歌ってみようとし始めたことには感動した。童謡を用いるだけでなく、自分でリズムミカルな詩のようなものをつくって、ことばのリズムを楽しむような使い方もやってみればよかったと思う。

② 大友幸子赤ちゃん版「ノンタン」シリーズ

一歳半位から一年間位、ほとんど固執といっているほどの愛着を、祐子はこのシリーズに対して持ち続けた。やはり、ことばの軽快なリズムを楽しむという聴覚的な

快感と、視覚的に訴えてくるはつきりと意味のわかるイラスト的な絵が、初めて絵本に出会う子供を、相乗効果をもって魅きつけていくように思う。が、しだいに、幼児用のノンタンシリーズに興味ひろがってくるにつれて、ストーリーにひきこまれていくように、祐子の楽しみ方も変わってきた。いたずらをして人を困らせたり、意地悪をしたり、約束を破ったり、と祐子にとって日頃、思いきりやれないことを、主人公のノンタンがどんどんやってしまうことを、彼女はどのように受けとめて、毎日くり返しノンタン絵本を楽しんでいたのだろうか。祐子の最も気に入った『もぐもぐもぐ』という本については空んじて楽しむようになり、頁を繰りながら、自分で読んで(?)ぬいぐるみ達に実演してみせるようにもなった。ことばのリズムとくりかえしの使い方がたいへん巧みであると思う。

③ 松谷みよ子赤ちゃんシリーズ

祐子とは、『いないいないばあ』『いいおかお』『みんなねんね』の三冊しか使っていない。ブルーナやノンタ

ンとはひと味もふた味も違った魅力のシリーズだと思
う。

絵は、中間色の割合に地味な色づかいで、ほのほのと
した雰囲気をかもし出している。使われることばもリズ
ミカルだが、どちらかといえば、母親が赤ちゃんを抱っ
こして話しかけたり、あやしたりする雰囲気に近い。日
常的なリズム感ですすめられているような感じである。

祐子のうけとめ方は、初めからお話の中味を受けとめて
楽しもうとしていたように思う。『いいおかお』で、ピ
スケットをもらった動物たちが、「おいしいおいしいは
どーこ?」と問いかけられる場面で、彼女も自分の頬を
たたいてみせながら共感を表現していたのがとても印象
的だった。

④二歳後半にはいつて祐子が好んで読みたがる本にもひ
とつの傾向がでてきた。かんざわとし子著『はけたよは
けたよ』松谷みよ子著『小さいモモちゃん』スロボトキ
ン著『ありがとう、どういたしまして』などがある。自
分が、実生活の中でうまくできるようになったことを、

お話の主人公達が失敗したりしながらとりくんでいくス
トーリーを、繰り返し繰り返し、読んでもらいたがるの
である。自分で、自分の成長のあとを確かめているのだ
ろうか。

この三年あまりを祐子とともにすごして来て、歌うこ
と、絵本を読むことは、私共親子にとって最大の楽しみの
ひとつだったが、その始まりにおいても、この二つの
ことは、切り離しては考えられない密接なつながりを
持っているように思えた。それは、視覚的刺激と、聴覚
的刺激の輻湊的な相乗効果というようなことなのかもしれ
ない。ひとつの楽しいことを、他の分野にも持ちこん
で生きる喜びをどんとひろげていくような生活のしか
たを、これからも祐子とともに、そして来月生まれてく
るはずのもう一人の子とともに、模索していきたいと
思っている。

五月の幼稚園は、とても生き生き感じられます。四月の緊張感から解放され、子ども達は、新しいクラスや先生、友だちとの関係の中に自分の居場所をみつけます。今月は、「五月の子どもたち」について、お二人の先生に書いていただきました。

新井先生の、自然に沿った生活の中の園の様子。又、中谷先生の、進級から少し慣れてきたこの時期の、子ども達の遊びと心の様子、素敵なお話、どうもありがとうございます。

先月から、松井とし先生の「園庭よりの連載がはじまりました。短かい文章の中に、保育者としての素直な気持ち、小さな感動が伝わってきます。これからも楽しみにしております。

一年生になった我が家の息子は、今、コマまわしに夢中です。はじめは、巻いたひもをひっぱるだけの簡単なものでしたが、今は本物のコマです。ブリキでできた、五十円位の安いカンゴマというの

が一番簡単で、上手に回せます。昔、コマ少年のお父さんにも教えてもらい、手のせや綱渡りなどのお手本も見せてもらいました。やりはじめると熱中するタイプなので、暇さえあれば、「見て、見て」とコマを投げています。今では、左手に持った小さな缶のフタの上にコマをのせられるようになりました。

コマの魅力って一体何なのでしょう。くるくると回り動くおもしろさでしょうか。まだヒモゴマのできない小さい子たちも、牛乳ビンのフタやどんぐりに楊枝をさして、回して遊びます。コマがくるくる回るのを見ているのは心地よいものです。ヒモゴマでも、少し練習すれば誰でも回せるようになるのも魅力の一つでしょう。それでいて、むずかしい技はいくらでもあり、奥は深いのです。一人でも複数でも楽しめます。コマに描かれた色鮮やかな模様がぐるぐる回って、別の美しい円に変わっていく、そんな世界を息子は楽しんでいるのでしょうか。(K)

幼児の教育

第八十九巻 第五号

(一九九〇年五月号)

定価四一〇円(本体三九八円)

平成二年五月一日 発行

編集兼発行人 本田和子

発行所 日本幼稚園協会

東京都文京区大塚二一一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

東京都港区三田五一一二

発売所 株式会社 フレーベル館

東京都千代田区神田小川町三一

振替口座 東京九一一九六四〇

電話 〇三一二九二七七八一

● 本誌購読のご注文は、発売所フレーベル館にお願いいたします。

● 万一、落丁・乱丁などがございましたら、おとりかえいたします。

フレーベル館 特別企画

●フレーベル先生創設幼稚園150周年記念ツアー

ヨーロッパ幼児教育視察

1990年7月29日(日)～8月11日(土) 14日間

東ドイツ・チューリンゲン地方・ロンドン・フランクフルト・ハーグ・アムステルダム・パリ



歓迎してくれた
フレーベル第2幼稚園の子どもたち



熱心に説明を聞く先生方



フレーベル先生の墓の前で

昨年のツアーより

ことは幼児教育の父、フリードリッヒ・フレーベル先生が世界で最初の幼稚園を創設して150年目に当たります。これを記念して、教育の原点を再確認し、また東西ヨーロッパの幼児教育の現場を視察する旅です。



フレーベル先生生誕の家の前で

主な訪問地

フレーベル先生ゆかりの地

東ドイツ・チューリンゲン地方

- エルフルト
- ハートブランケンブルグ
- オーベルバイスバッハ

イギリス

- ロンドン

オランダ

- アムステルダム ●ハーグ

フランス

- パリ



旅行期間 1990年7月29日(日)～8月11日(土) 14日間

旅行代金 815,000円 (ローンによるお支払いも可能です)

募集人員 25名 (定員になり次第締切らせていただきます)

申込締切日 1990年5月31日(木)

企画：キンダーブックの **フレーベル館**

旅行主催：日本交通公社  運輸大臣登録 一般旅行業第64号

●お問い合わせ先

フレーベル館 ヨーロッパ幼児教育視察係
東京都千代田区神田小川町3-1
〒101 電話 03 (292) 7781(代)

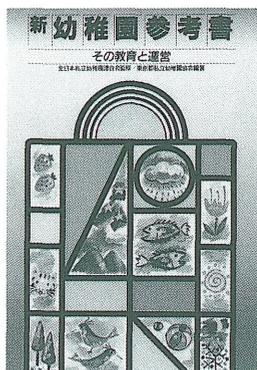
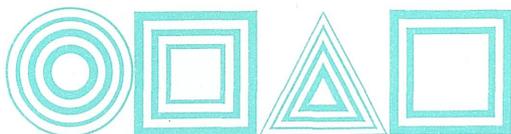
JTB団体旅行新宿支店 ヨーロッパ幼児教育視察係
(運輸大臣登録一般旅行業第64号)
東京都新宿区西新宿1-18-8 スカイビル4階
〒160 電話 03(346)0181(月～金09:30～17:30)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

キンダーブックの

フレーベル館

「幼稚園参考書」が生まれ変わりました。
 幼児の自発性を伸ばすには——
 遊びの総合性をどう組み立てるか——
 新しい教育要領をふまえた
 『新幼稚園参考書』は
 先生方の強力な助っ人です。



目次より

- 第一章 幼稚園教育の本質を考える**
- 1 幼児が育つことと幼稚園教育
 - 2 幼児を理解する
 - 3 幼児の生活とは
 - 4 教育要領改訂の視点ととらえ方
 - 5 幼児教育の内容と方法
 - 6 私立幼稚園の特性と存在の意義
- 第二章 幼児の教育を計画し実践するために**
- 1 教育課程・指導計画を考える
 - 2 指導計画作成のポイント
 - 3 指導計画の実際例とその展開
—長期・短期、年齢別、保育形態別
- 第三章 幼児の生活を考え充実させていくために**
- 各園の実際例から—主体的生活・
行事・総合性・領域・障害児
- 第四章 園やクラスをいきいきと運営するために**
- 1 園運営の基本的考え方
 - 2 クラス運営の実際
 - 3 保育の担い手としての保育者
- 第五章 幼稚園教育の歴史と展望**

B5判・上製本・436頁

定価4,000円（本体3,883円）

全日本私立幼稚園連合会監修／東京都私立幼稚園協会編著

その教育と運営

新幼稚園教育要領と実践へ 新幼稚園参考書

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

キンダーブックの

フレーベル館